

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第9集

大阪府茨木市所在

安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査

中間報告書

安威川ダム建設関係地域の自然・歴史・文化

1997. 3

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

大阪府茨木市所在

安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査

中間報告書

安威川ダム建設関係地域の自然・歴史・文化

1997. 3

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

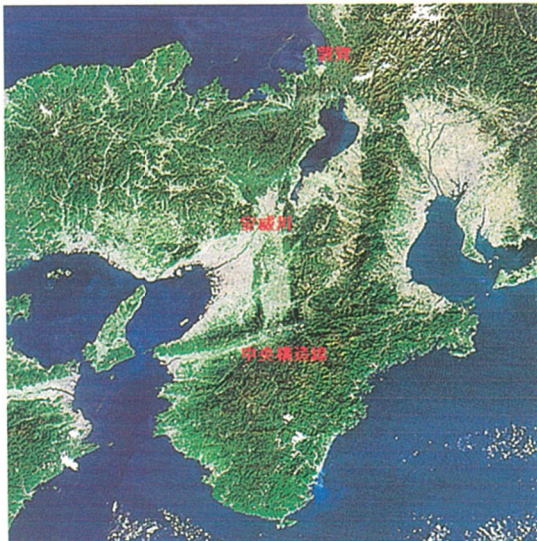


安威川ダム建設周辺地航空写真（1996年撮影・大阪府安威川ダム建設事務所提供）



1. 山地と盆地 (日本列島の地質編集委員会 1996)

近畿地方トライアングル

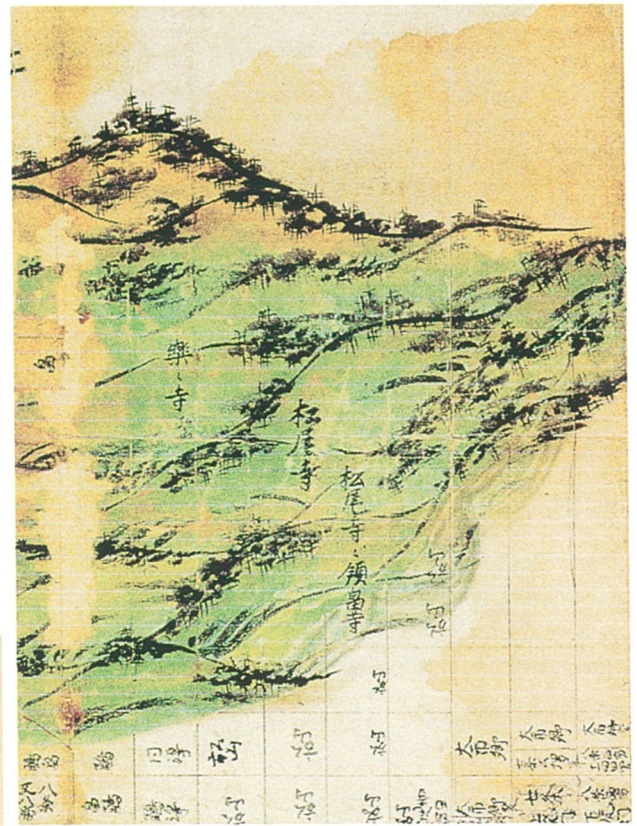


2. LANDSATから見る ©DESTEC

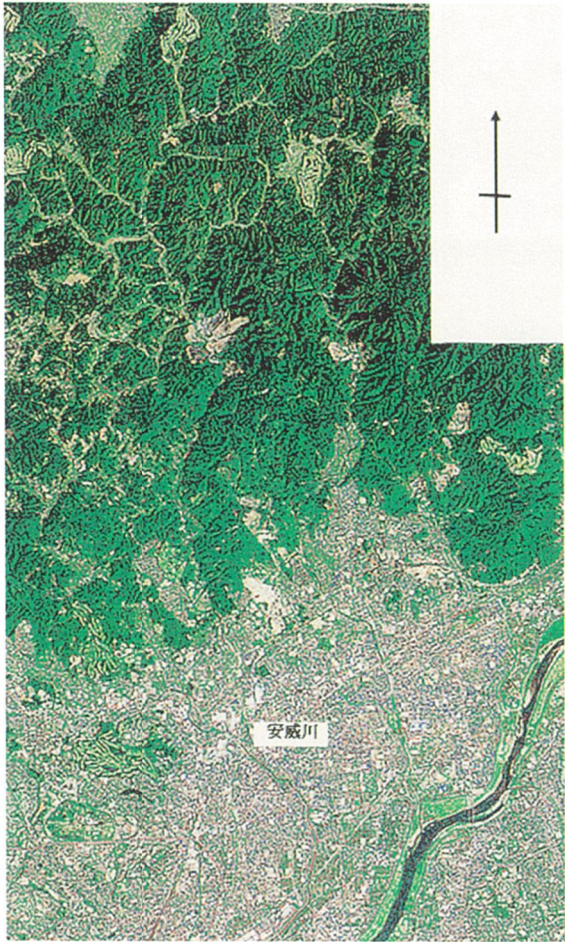
絵図にみる古代・中世の植生



3. 天平勝宝八歳 (756) 摂津国水成瀬絵図



4. 嘉暦四年 (1329) 播磨国鶴庄絵図



1. LANDSATでみた安威川流域



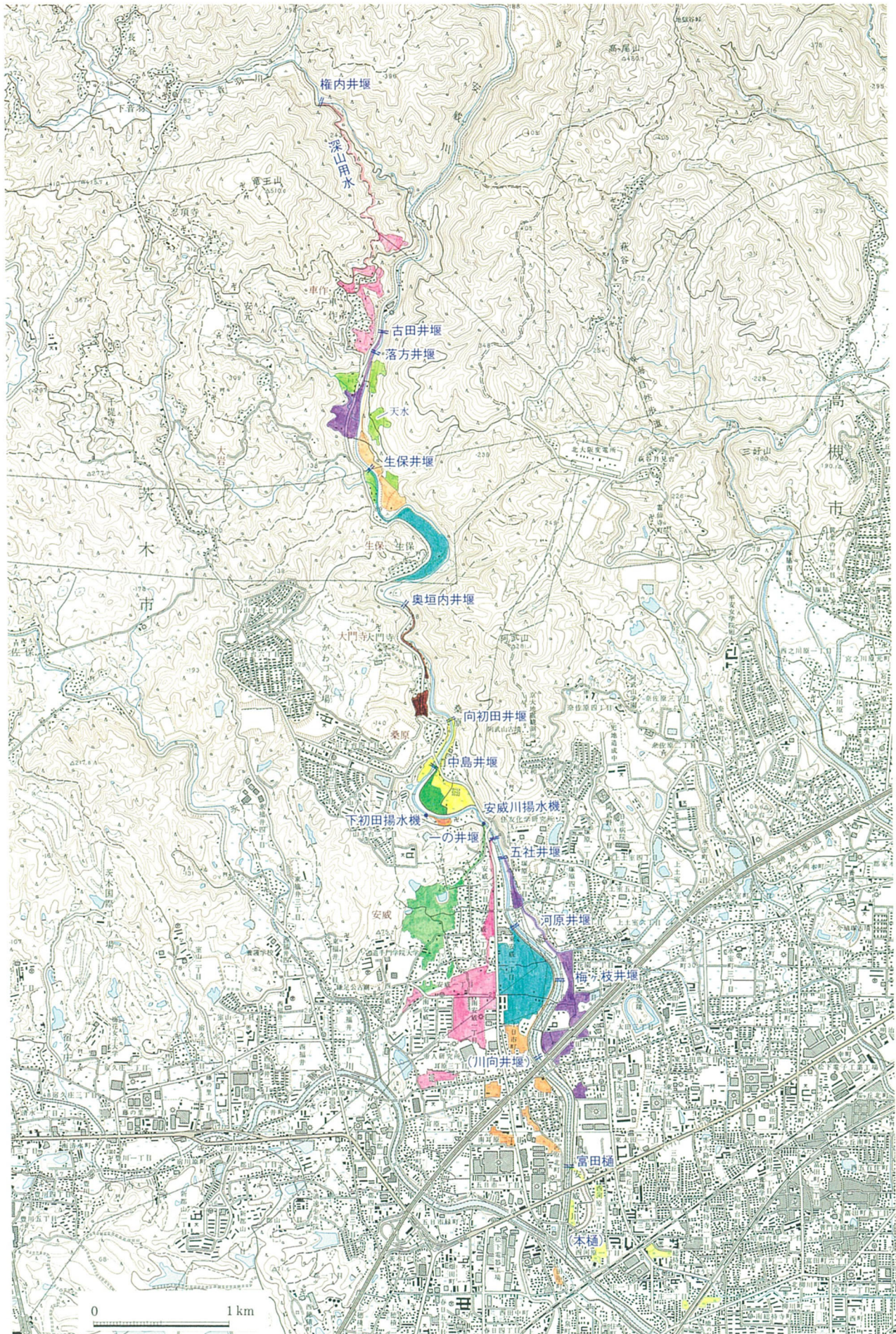
3. 大阪府・京都府境の碎石現場
(財大阪府文化財調査研究センター 1991)



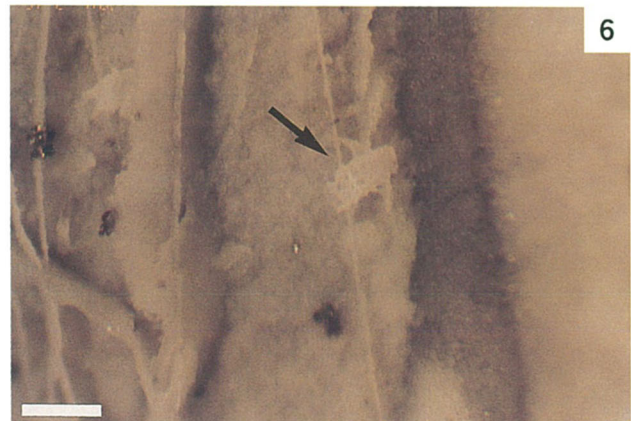
2. 二料川流域の植生
(財大阪府文化財調査研究センター 1991)



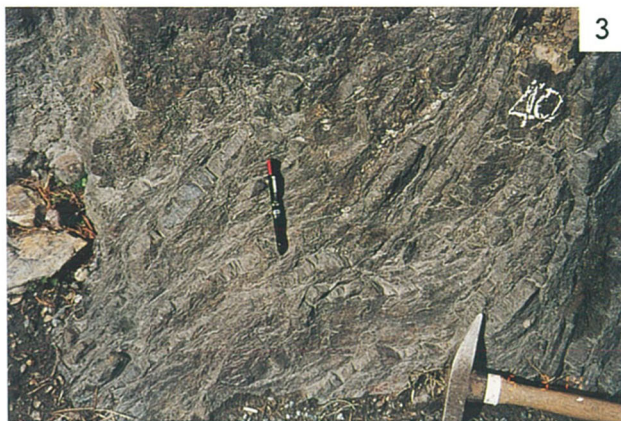
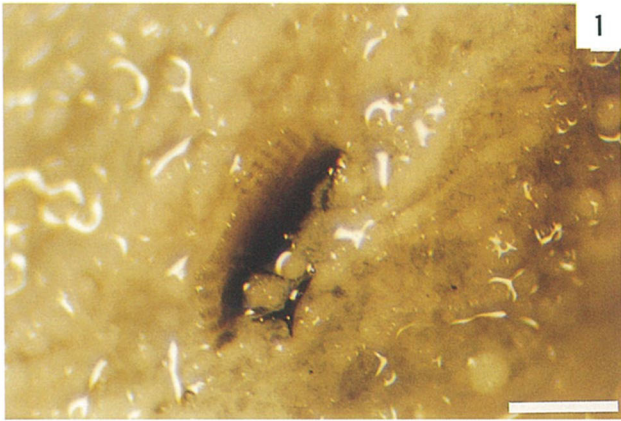
4. 棚田の発達する花崗岩地域
(財大阪府文化財調査研究センター 1991)

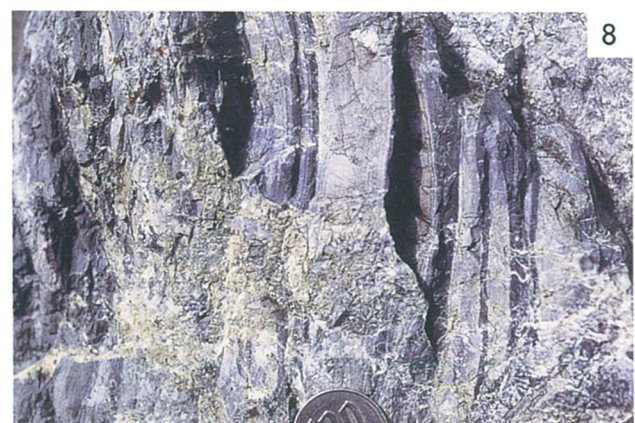
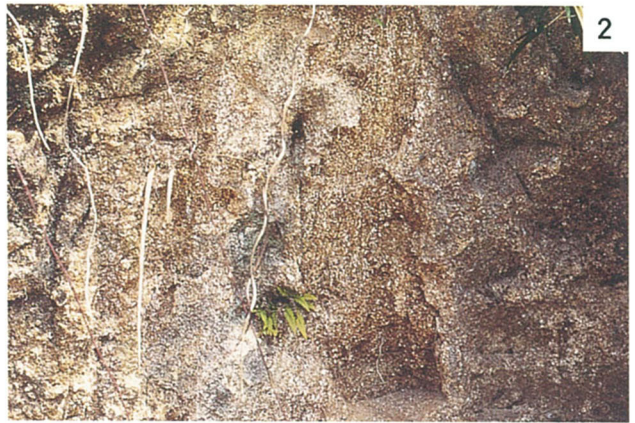


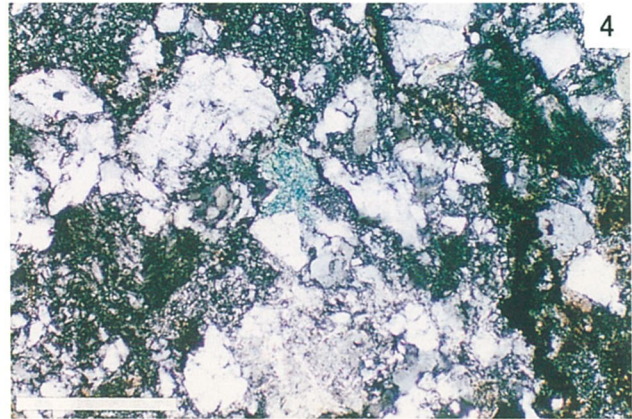
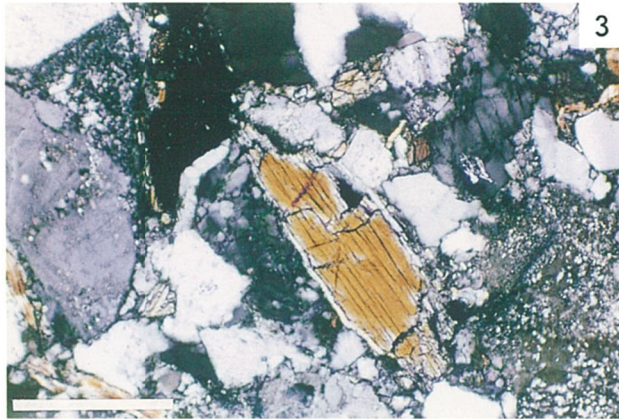
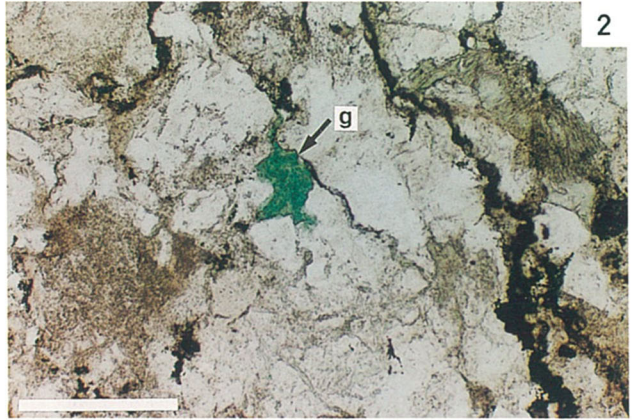
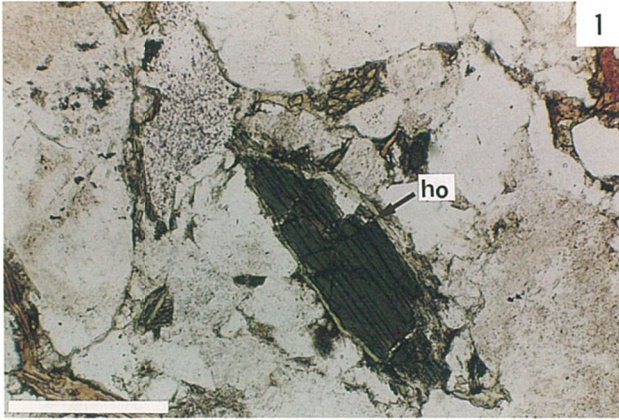
安威川流域の水利・灌漑範囲



(解説：本文頁参照)







安威川両岸の広葉樹林 (大門寺 1991.7.13)



安威川左岸のアラカシ林 (大門寺 1993.2.19)



村道の桜並木。満開は市内より一週間遅れ (車作 1994.4.16)



ニホンザル (忍頂寺 1993.6.12)



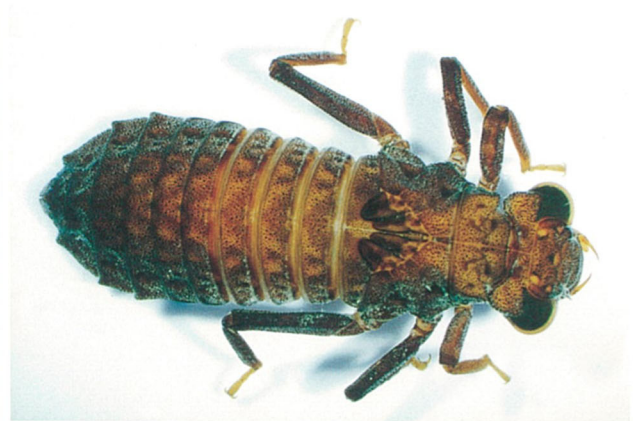
オオサンショウウオ (L.100cm) (亀岡市東別院町 1993.5.16)



池の上のモリアオガエルの卵塊 (下音羽 1993.6.12)



アブを捕えたハナグモ (高槻市二料 1993.5.16)



ムカシトンボの幼虫 (亀岡市宝谷 1992.7.17)



ユウレイグモの交接 (高槻市 1993.6.6)



オオヤミロカニグモの交接 (車作 1993.5.16)



調査風景 (大門寺 1993.5.16)



クモ類などの液浸標本 (1992.5.17)



元文5年(1740)安威川等洪水につき切所水入村々彩色絵図(部分)(高槻市・松村昌蔵家所蔵)

江戸時代には自然の猛威にさほど有効な手はうてず、対策が後手にまわるので、とくに長雨、豪雨による河川の氾濫に対して流域の住民は悩まされ続けた。写真は元文5年(1740)6月9日夜(現行グレゴリオ暦では7月2日にあたる)の洪水による茨木川・安威川・芥川・松尾川(各支流を含む)4河川の堤が切れた箇所を、旧唐崎村の庄屋が絵図に描いたもののうち、安威川と茨木川の部分である。安威川堤防の決壊は11箇所にも及んでいる(Ⅶ. 歴史部門第4章第4節参照)。

序 文

京都府亀岡市の竜ヶ尾山に源があり、大阪府茨木市東部の山間部を南流しながらいくつかの支流をあわせ、摂津市に入って西に流れを変えて神崎川に合流する安威川は、その流域に豊かな自然を育み、また人々の生活に様々な恵みをもたらしてきました。その一方で安威川は、山間部の急流や平野部の天井川化などにより、流域の人々に災厄をもたらす存在でもありました。

昭和42年の北摂豪雨災害を契機として、大阪府はこの安威川の治水、利水を目的とする多目的ダムの建設を中心とした「安威川総合開発事業」を計画し、事業の具体化を進めてこられました。このなかで、大阪府は、ダム建設によって変貌を遂げる可能性のある流域の自然や歴史・文化などを記録する必要性を認識され、大阪府教育委員会の指導のもと、平成2年度から当センターが「安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査」を実施してきた次第です。

この総合調査は、地質、生物等の自然系の分野をはじめ記念物、建造物、美術工芸品、古文書、金石文、民俗、芸能等、多分野の調査を実施するもので、当センターとしても初めて経験する調査事業でありましたが、幸いにも、これらの分野における第一人者をお願いをしたところ、快く調査委員として調査に参加していただくことになり、文化庁を始め、大阪府教育委員会、地元の茨木市及び高槻市両教育委員会からの協力を得て、総合調査委員会を組織し、調査にあたることができました。

足かけ6年におよぶ調査の実施において、各委員および調査員の方々には、ひとかたならぬご苦勞をお掛けいたしました。この報告書に記されるように、調査によって収集された各種の記録・資料は膨大なものであり、その成果には特筆すべきことも多く、さらに、各分野ごとに組織された研究会等における各種の研究の交流や、調査委員会での成果報告及び意見交換で得られた知見なども、今後の様々な学術研究に大きく資するものと考えます。

安威川総合開発事業によって、安威川をとりまく自然や文化も大きく変化することが予測されます。ダム建設以前の安威川流域の自然と歴史・文化の様相を具体的に記録したこの報告書が、今後の事業計画の評価等に資するものになれば幸いです。

この総合調査を遂行するにあたり、長年にわたる多大なご協力、ご指導を賜った、大阪府教育委員会、大阪府土木部、大阪府安威川ダム建設事務所をはじめとする関係各位、現地調査にご協力いただいた地元の方々に深謝して序の言葉といたします。

平成9年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理事長 坪井清足

例 言

1. 本書は、大阪府教育委員会の指示により、(財)大阪府文化財調査研究センターが、大阪府安威川ダム建設事務所の委託を受けて実施した「安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査（通称、安威川総合調査）」の報告書である。ただし、(財)大阪府文化財調査研究センターは、法人組織統合のため、平成7年度に(財)大阪文化財センターから名称を改め、大阪府安威川ダム建設事務所も平成5年度に大阪府北部特定事業建設事務所から名称変更をおこなっている。

2. 調査は、(財)大阪府文化財調査研究センターを事務局とし、同センター理事長坪井清足を委員長とする調査委員会を編成、各分野別に委員を委嘱し実施した。

3. 調査は、平成2年度からはじめ、当初、平成3年度から2.5年間の現地調査を実施し、平成5年度末に完了するという計画であった。

しかし、ダム建設事業の進展にあわせた関係上、調査は、平成7年度段階で着手できた範囲で終了し、平成8年度で「中間報告書」を作成することになった。

4. 調査の対象地区は以下の6地区である。

茨木市 ^{くろまつり}
*車作
^{おおいわ}
*大岩
^{しょうぼ}
*生保

^{だいもんじ}
大門寺
^{くわのはら}
*桑原
^{あ い}
安威

*：調査終了地区

5. 調査は、以下の分野に分けて実施した。

記念物Ⅰ	(考古部門)
記念物Ⅱ	(地理部門)
天然記念物Ⅰ	(地質部門)
天然記念物Ⅱ	(生物部門)
天然記念物統括	(“)
有形文化財統括	(建造物部門)
有形文化財Ⅰ	(“)
有形文化財Ⅱ	(美術工芸品部門)
有形文化財Ⅲ	(石造物部門)
有形文化財Ⅲ統括	(歴史部門)
民俗文化財統括	(民俗・芸能部門)
無形文化財統括	(“)

6. (財)大阪府文化財調査研究センターの総合調査担当者は以下のとおりである。

平成2・3年度 調査課長中西靖人・調査課技師村上年生

平成4年度 調査課長中西靖人・主幹芝野圭之助・調査課主任技師村上年生

平成5年度 調査課長中西靖人・主幹芝野圭之助・調査課技師金光正裕

平成6年度 調査課長中西靖人・主幹芝野圭之助・調査課技師合田幸美

平成7・8年度 調査部長井藤 徹・参事兼調整課長中西靖人・推進係長大谷治孝・同技師井藤暁子

7. 安威川ダム建設の概要・事業経過については、大阪府安威川ダム建設事務所に記述をお願いした。

また、地元の理解が必要な調査（建造物・美術工芸品・石造物・歴史・民俗部門）については、同事務所のお世話になった。

8. 本書の執筆の分担は目次に記載した。
9. 本書の編集は、事務局推進係長大谷治孝のもと、技師井藤暁子が担当した。
10. 調査に際しては、大阪府教育委員会、茨木市教育委員会、高槻市教育委員会のほか、車作、大岩、生保、桑原の地元自治会長、その他多くの方々のお世話になった。記して感謝の意を表したい。

本文目次

I. 調査の経緯と方法

第1章 安威川ダム建設事業経過	大阪府安威川ダム建設事務所	1
第1節 事業の目的		1
第2節 事業の概要		1
第3節 事業経過		4
第4節 文化財総合調査発足の経緯		4
第5節 安威川総合調査事業経過		5
第2章 総合調査に至る経緯	事務局	5
第1節 総合調査の契機		5
第2節 総合調査の準備		6
第3節 総合調査の開始		6
第3章 総合調査の方法	事務局	6
第1節 調査期間		6
第2節 対象地域		7
第3節 調査内容		7
第4節 総合調査委員会について		8

II. 考古部門

田代克己

はじめに	13
第1章 安威川流域の遺跡	13
第1節 旧石器時代の遺跡	13
第2節 縄文時代の遺跡	14
第3節 弥生時代の遺跡	15
第4節 古墳時代の遺跡と古墳	16
第5節 古代以降の遺跡	20
第2章 分布調査報告	22
第1節 分布調査の成果	22
第2節 聞き取りによる成果	22

III. 地理部門

高橋 学

はじめに	25
第1章 調査方法	25
第2章 近畿地方レベルでみた安威川流域	25
第1節 山地	25
第2節 丘陵	27

第3節	里山からニュータウンへ	27
第4節	更新世段丘	29
第3章	安威川の水系	31
第1節	安威川の水系	31
第2節	分水界と行政界のずれ	31
第4章	安威川流域の地形環境と土地利用	34
第1節	山地の地形環境と土地利用	37
第2節	山地域の土地開発と灌漑	45
第3節	丘陵	46
第4節	平野	49
おわりに		55

IV. 地質部門

井本伸廣・楠 利夫・小原正顕

第1章	丹波帯・超丹波帯	57
第1節	丹波帯・超丹波帯とは	57
第2節	調査地域の地質概要	61
第2章	茨木花崗岩	73
第1節	能勢岩体	73
第2節	妙見岩体	75
第3節	岩脈・ホルンフェルス	76
第4節	茨木花崗岩の形成	76

V. 生物部門

第1章	安威川流域の脊椎動物相	那須孝悌・西川喜朗	107
第1節	調査地域の概要		107
第2節	哺乳動物相		107
第3節	爬虫類相		108
第4節	鳥類相		109
第5節	両生類相		113
第6節	魚類相		113
第2章	安威川流域の昆虫類およびクモ類	西川喜朗	116
第1節	調査地		116
第2節	安威川流域の昆虫類		118
第3節	特記すべき昆虫類		191
第4節	安威川流域のクモ類		192
第5節	特記すべきクモ類		200
第3章	安威川流域および周辺の鳥類	橋田俊彦	202
第1節	調査の概略		202

第2節 調査地域	202
第3節 調査方法	206
第4節 調査日時	206
第5節 調査結果	207

VI. 建造物部門

第1章 安威川周辺の民家と集落	林野全孝・大場 修	227
はじめに		227
第1節 大岩、桑原地区の民家		227
第2節 車作地区の民家		239
第3節 生保地区の民家と集落構成		249
まとめ		261
第2章 社寺建築	青山賢信	285
はじめに		285
第1節 神社と寺院		285
第2節 江戸時代以前における神社本殿（鎮守社）と本地堂（寺院本堂）の位置関係		287
第3節 神社本殿建築		288
第4節 寺院		290
第5節 社寺建築に対する建築規制と普請願書		294
第6節 普請願書と建築		298
第7節 社寺建築と大工の動き		299
第8節 各論		300
むすび		326
〔付表〕村別による大工の仕事を先寺社及び作事内容一覧		343

VII. 歴史部門

はじめに	松尾 寿	351
第1章 古代・中世	福留照尚	351
第1節 竹村屯倉		351
第2節 忍頂寺と寺辺村五ヶ荘		353
第3節 大門寺の勸進写経		360
第4節 国人安威氏と守護細川氏	松尾 寿	363
〔写真図版解説〕 安威川流域関係史料	松尾 寿	367
第2章 近世	松尾 寿	373
第1節 幕藩体制の成立と東摂地方		373
第2節 安威川流域支配の領主		379
第3節 寒天製造のはじまりと安威川		382
第4節 畑中権内と深山水路		382

第3章 近現代	福山 昭	384
第1節 維新の幕開けと行政区画の変遷		384
第2節 石河村の動向		386
第3節 戦後地方自治制度の改革と茨木市への編入		388
第4章 安威川の歴史（その1—前近代）	福山 昭	390
第1節 幕藩体制確立期における水利秩序の形成		390
第2節 高槻藩の水利整備		392
第3節 水利組織と水論		395
第4節 安威川・茨木川筋の洪水		396
第5章 安威川の歴史（その2—近現代）	福山 昭	397
第1節 明治初年の洪水と神崎川改修ならびに水利組合の組織化		397
第2節 洪水の続発と淀川改修		399
第3節 耕地整理組合		400
第4節 安威川・茨木川の改修		401
第5節 戦後の動向		403

VIII. 美術工芸品部門

吉原忠雄

はじめに		405
第1章 桑原地区の調査		405
第1節 調査概要		405
第2節 地福寺の調査		406
第2章 生保地区の調査		409
第1節 調査概要		409
第2節 正覚寺の調査		410
第3節 諏訪神社の調査		412
第4節 個人所蔵品の調査		413
第3章 大岩地区の調査		413
第1節 調査概要		413
第2節 円福寺の調査		414
第3節 大歳神社の調査		415
第4節 八幡神社の調査		415
第5節 大北地藏堂の調査		416
第4章 車作地区の調査		416
第1節 調査概要		416
第2節 法林寺の調査		416
第3節 皇大神宮の調査		417
おわりに		417

IX. 石造物部門

藤澤典彦

第1章 概要	451
第2章 年度別調査概要	451
第1節 平成3年度調査（大岩地区・忍頂寺地区）	451
第2節 平成4年度調査（桑原地区）	453
第3節 平成5年度調査（桑原地区）	455
第4節 平成6年度調査（車作地区）	456
第5節 平成7年度調査（生保地区）	457
〔付表〕金石文調査資料	458

X. 民俗・芸能部門

第1章 民俗調査	上井久義	503
第1節 集落構成と祭祀		503
第2節 年中行事		511
第3節 生業伝承		515
第4節 通過儀礼		522
第2章 無形文化財調査	宇津木秀甫	537
はじめに		537
第1節 「まつり」関係		538
第2節 「歌謡」関係		541
さいごに		545
〔付〕安威川流域歌謡採譜資料		547

巻頭図版

図版 1	安威川ダム建設周辺地航空写真
図版 2	地理調査 (1) 近畿地方トライアングル、絵図にみる古代・中世の植生
図版 3	地理調査 (2) 関連地域の航空写真
図版 4	地理調査 (3) 安威川流域の水利・灌漑範囲
図版 5	地質調査 (1)
図版 6	地質調査 (2)
図版 7	地質調査 (3)
図版 8	地質調査 (4)・安威川流域の生物調査 (1)
図版 9	安威川流域の生物調査 (2)
図版 10	歴史調査 元文 5 年 (1740) 安威川等洪水につき切所水入村々彩色図

挿図・挿表・写真・図版目次

I. 総合調査の経緯と方法

図 1	安威川ダム全体計画 (案)	2
図 2	安威川ダム計画図	3
図 3	調査地周辺図	11
表 1	ダム本体	1
表 2	ダムの貯水池	1
表 3	安威川総合調査委員会構成表	9
表 4	各種研究会調査員	10
表 5	行政区の変遷	12

II. 考古部門

図 1	三島地域図	13
図 2	三島平野の旧石器時代遺跡分布図	14
図 3	塚原遺跡出土握斧	14
図 4	塚原遺跡出土旧石器	15
図 5	三島平野の縄文時代遺跡分布図	16
図 6	東奈良遺跡出土鋳型拓影	16
図 7	三島平野の弥生時代遺跡分布図	17
図 8	三島平野の古墳分布図	19
図 9	阿武山古墳墳形図	20
図 10	太田廃寺出土舍利容器皿	20

図11	清水廃寺・みこし塚伝承地	21
図12	安威川流域周辺文化財分布図	23
写真1	継体天皇陵前方部	18
写真2	今城塚古墳の前方部と濠	18
写真3	阿武山古墳全景	18
写真4	太田廃寺跡の現況	21
写真5	安威砦遠景	21

Ⅲ. 地理部門

巻頭図版 2	近畿地方トライアングル、絵図にみる古代・中世の植生	
巻頭図版 3	関連地域の航空写真	
巻頭図版 4	安威川流域の水利・灌漑範囲	
図 1	近畿トライアングル北西辺の活断層	26
図 2	高度経済成長期の低湿地開発と災害	29
図 3	更新世段丘に築造された巨大古墳	30
図 4	安威川水系図	32
図 5	安威川流域付近の行政界	33
図 6	茨木川と安威川	34
図 7 a	茨木川旧河道に立地する茨木市役所	35
図 7 b	生田川旧河道に立地する神戸市役所	35
図 8	東別院町付近の地域概観	36
図 9	谷中分水界	38
図10	鴻応山から竜王山にかけての地域概観	42
図11	花崗岩地域の地域概観	44
図12	丘陵地域の地域概観	47
図13	開析谷に建設された北陵中学校	48
図14	更新世段丘の安威面・耳原面	50
図15	条里型土地割の分布	51
図16	歴史時代の気候変動	52
図17	淀川に合流できない安威川	54
写真 1	兵庫県南部地震で大被害を受けた神戸市役所	35
写真 2	東別院町付近の空中写真	37
写真 3	丘陵を大規模に開発した茨木サニータウン	49
P L. 1	北摂山地のリニアメント	39
P L. 2	北摂山地の活断層他	40

Ⅳ. 地質部門

巻頭図版 5	地質調査 (1)	
--------	----------	--

巻頭図版 6	地質調査 (2)	
巻頭図版 7	地質調査 (3)	
巻頭図版 8	地質調査 (4)	
図 1	丹波帯の 2 組の地層群	58
図 2	北摂山地に分布する丹波層群の構造区分	61
図 3	微化石産出地点位置図	62
図 4	亀岡市春日部セクションのルートマップ	63
図 5	亀岡市春日部セクション柱状図と産出微化石	66
図 6	亀岡市東別院、三畳紀チャートのルートマップおよび露頭スケッチ	67
図 7	亀岡市東別院、三畳紀チャートの柱状図と主要な微化石の産出分布	67
図 8	<i>Neospathodus homeri</i> と <i>Neospathodus triangularis</i> の計測値より 算出した形態比率の分布範囲と分布	68
図 9	下部～中部三畳系のコノドント帯	71
図10	ペルム紀～ジュラ紀の放散虫化石帯と、今回の試料から産出した主な 放散虫化石の示す年代範囲	72
図11	茨木花崗岩及び周辺の地質図	74
表 1	亀岡市東別院の三畳紀チャートから産出した放散虫化石とコノドント 化石の試料番号と化石リスト	70
PL. 1	放散虫化石 (1)	83
PL. 2	放散虫化石 (2)	84
PL. 3	コノドント化石 (1)	85
PL. 4	コノドント化石 (2)	86
PL. 5	放散虫化石 (3)・コノドント化石 (3)	87
PL. 6	放散虫化石 (4)	88
PL. 7	放散虫化石 (5)	89
PL. 8	放散虫化石 (6)	90
PL. 9	放散虫化石 (7)	91
PL. 10	放散虫化石 (8)	92
PL. 11	放散虫化石 (9)	93
PL. 12	コノドント化石 (4)	94
PL. 13	コノドント化石 (5)	95
PL. 14	コノドント化石 (6)	96
PL. 15	有孔虫化石 (1)・魚歯	97
PL. 16	放散虫化石 (10)	98
PL. 17	放散虫化石 (11)	99
PL. 18	放散虫化石 (12)	100
PL. 19	放散虫化石 (13)	101
PL. 20	放散虫化石 (14)	102

P L. 21	放散虫化石 (15)・有孔虫化石 (2)	103
P L. 22	放散虫化石 (16)	104
P L. 23	放散虫化石 (17)	105

V. 生物部門

巻頭図版 8	安威川流域の生物調査 (1)	
巻頭図版 9	安威川流域の生物調査 (2)	
図 1	安威川流域生物調査地点	117
図 2	鳥類調査地点 (1)	203
図 3	鳥類調査地点 (2)	204
図 4	鳥類調査地点 (3)	205
表 1	安威川流域における鳥類確認種	210
表 2	平成 4 年度 確認種リスト	213
表 3	平成 6 年度 H コース (その 1)	214
表 4	平成 6 年度 H コース (その 2)	215
表 5	平成 6 年度 I コース (その 1)	216
表 6	平成 6 年度 I コース (その 2)	217
表 7	平成 6 年度 H+I コース (その 1)	218
表 8	平成 6 年度 H+I コース (その 2)	219
表 9	平成 8 年度 H コース (その 1)	220
表 10	平成 8 年度 H コース (その 2)	221
表 11	平成 8 年度 I コース (その 1)	222
表 12	平成 8 年度 I コース (その 2)	223
表 13	平成 8 年度 H+I コース (その 1)	224
表 14	平成 8 年度 H+I コース (その 2)	225

VI. 建造物部門

図 1	大岩、桑原地区 伝統的家屋分布図 (その 1)	229
図 2	大岩、桑原地区 伝統的家屋分布図 (その 2)	230
図 3	大岩、桑原地区 伝統的家屋分布図 (その 3)	231
図 4	大岩地区 A 家住宅	232
図 5	桑原地区 B 家住宅	233
図 6	桑原地区 C 家住宅	234
図 7	大岩地区 D 家住宅	235
図 8	大岩地区 E 家住宅	236
図 9	大岩地区 F 家住宅	237
図 10	大岩地区 G 家住宅	238
図 11	車作地区 集落配置図	242

図12	車作地区 H家住宅	243
図13	車作地区 I家住宅	244
図14	車作地区 J家住宅	245
図15	車作地区 K家住宅	246
図16	車作地区 L家住宅	247
図17	車作地区 J家住宅	248
図18	車作地区 L家住宅	248
図19	車作地区 M家住宅	248
図20	生保地区 擁壁分類図	253
図21	生保地区 植栽分布図	254
図22	生保地区 樹種分類図	255
図23	生保地区 建物の用途別分布図	256
図24	生保地区 主屋の伝統形式別分布図	257
図25	生保地区 N家住宅	258
図26	生保地区 O家住宅	259
図27	生保地区 P家住宅	259
図28	生保地区 Q家住宅	260
図29	鎮守社と本地堂の位置関係模式図	287
図30	江戸時代普請願書の描法変遷	297
図31	福井大工組	328
図32	法林寺及び皇大神宮境内図	329
図33	法林寺本堂現状平面図	329
図34	皇大神宮本殿現状平面図	330
図35	素盞鳴命神社本殿現状平面図	331
図36	八所神社本殿現状平面図	331
図37	円福寺及び大歳神社境内図	332
図38	円福寺本堂現状・復原平面図	333
図39	八幡神社境内図・本殿現状平面図	334
図40	諏訪神社境内図	335
図41	諏訪神社本殿現状平面図	335
図42	正覚寺境内図・本堂現状・復原平面図	336
図43	地福寺境内図	337
図44	地福寺観音堂現状平面図	337
図45	地福寺本堂庫裏現状・復原平面図	338
図46	大門寺及び十二所権現境内図	339
図47	八所神社本殿現状平面図	339
図48	八所神社摂社本殿平面図	340
図49	乗雲寺本堂復原平面図	341

図50	教恩寺本堂復原平面図	342
表1	安威川周辺（大岩、桑原地区）調査民家一覧表	228
表2	安威川周辺（車作地区）調査民家一覧表	241
表3	安威川周辺（生保地区）調査民家一覧表	252
写真1	法林寺本堂 正面	330
写真2	法林寺本堂 内・外陣境	330
写真3	法林寺本堂 妻飾	330
写真4	皇大神宮本殿 正面	330
写真5	皇大神宮本殿 身舎組物	330
写真6	皇大神宮本殿 身舎正面蟻股	330
写真7	素盞鳴命神社本殿 全景	331
写真8	素盞鳴命神社本殿 組物海老虹梁	331
写真9	八所神社本殿 全景	331
写真10	八所神社本殿 向拝組物・海老虹梁・手挟	331
写真11	円福寺鼓楼	332
写真12	円福寺本堂 正面	332
写真13	円福寺本堂 外陣	332
写真14	大歳神社本殿 妻飾	332
写真15	八幡神社 全景	334
写真16	八幡神社本殿 正面	334
写真17	八幡神社本殿 妻飾	334
写真18	八幡神社本殿 組物・海老虹梁	334
写真19	諏訪神社 御正躰厨子棟札	335
写真20	諏訪神社本殿 正面	335
写真21	諏訪神社本殿 組物	335
写真22	諏訪神社本殿 蟻股	335
写真23	正覚寺本堂 全景	336
写真24	正覚寺本堂 内・外陣境	336
写真25	地福寺観音堂 正面	337
写真26	地福寺観音堂 厨子	337
写真27	地福寺観音堂 厨子組物	337
写真28	正覚寺全景	338
写真29	正覚寺本堂 内陣	338
写真30	大門寺本堂（右手）と十二所権現（左手）	339
写真31	十二所権現本殿 正面	339
写真32	八所神社本殿 全景	339
写真33	八所神社本殿 向拝組物（二次）	340
写真34	八所神社本殿 背面蟻股（二次）	340

写真35	八所神社本殿 妻側組物	340
写真36	八所神社撰社本殿 正面	340
写真37	八所神社撰社本殿 側面	340
写真38	乗雲寺 全景	341
写真39	乗雲寺 内・外陣境	341
写真40	乗雲寺本堂 結界及び結界痕跡	341
写真41	教恩寺本堂 側面	342
写真42	教恩寺本堂 内・外陣境	342
P L. 1	大岩地区 A家住宅 (現在無住)	263
P L. 2	桑原地区 B家住宅	264
P L. 3	桑原地区 C家住宅	265
P L. 4	大岩地区 D家住宅・E家住宅	266
P L. 5	大岩地区 E家住宅	267
P L. 6	大岩地区 F家住宅	268
P L. 7	大岩地区 F家住宅・G家住宅	269
P L. 8	車作地区 H家住宅	270
P L. 9	車作地区 H家住宅・I家住宅	271
P L. 10	車作地区 I家住宅・J家住宅	272
P L. 11	車作地区 J家住宅	273
P L. 12	車作地区 J家住宅・K家住宅	274
P L. 13	車作地区 K家住宅・L家住宅	275
P L. 14	車作地区 L家住宅	276
P L. 15	車作地区 M家住宅・生保地区 集落景観	277
P L. 16	生保地区 集落景観	278
P L. 17	生保地区 集落景観・N家住宅	279
P L. 18	生保地区 N家住宅	280
P L. 19	生保地区 O家住宅・P家住宅	281
P L. 20	生保地区 P家住宅	282
P L. 21	生保地区 Q家住宅	283

VII. 歴史部門

巻頭図版10 元文5年(1740) 安威川等洪水につき切所水入村々彩色図

表1	茨木市域内遺存太閤検地帳	377
表2	調査対象地域近世領主変遷表	379
表3	行政区画の変遷	385
表4	町村制の施行	386
表5	石河村の戸数・人口	386
表6	石河村の農家副業品	387

表 7	石河村の寒天業	387
表 8	(保) 石河信用購買組合の概況	388
表 9	水利組織の構成村落	395
表10	明治元年の堤防決壊	397
表11	神安普通水利組合の区域と組合会議員	398
表12	耕地整理組合の概要	400
写真 1	水田の稲穂のかたわらを通る深山水路	383
P L. 1	安威川流域関係史料 (一)	371
P L. 2	安威川流域関係史料 (二)	372

VIII. 美術工芸品部門

P L. 1	桑原地区 (地福寺 1)	421
P L. 2	桑原地区 (地福寺 2)	422
P L. 3	桑原地区 (地福寺 3)	423
P L. 4	桑原地区 (地福寺 4)	424
P L. 5	桑原地区 (地福寺 5)	425
P L. 6	桑原地区 (地福寺 6)	426
P L. 7	桑原地区 (地福寺 7)	427
P L. 8	桑原地区 (地福寺 8)	428
P L. 9	生保地区 (正覚寺 1)	429
P L. 10	生保地区 (正覚寺 2)	430
P L. 11	生保地区 (正覚寺 3)	431
P L. 12	生保地区 (正覚寺 4)	432
P L. 13	生保地区 (正覚寺 5)・(諏訪神社 1)	433
P L. 14	生保地区 (諏訪神社 2)	434
P L. 15	生保地区 (諏訪神社 3)	435
P L. 16	生保地区 (諏訪神社 4)	436
P L. 17	生保地区 (諏訪神社 5)	437
P L. 18	生保地区 (諏訪神社 6)	438
P L. 19	大岩地区 (円福寺 1)	439
P L. 20	大岩地区 (円福寺 2)	440
P L. 21	大岩地区 (円福寺 3)	441
P L. 22	大岩地区 (円福寺 4)	442
P L. 23	大岩地区 (大蔵神社 1)	443
P L. 24	大岩地区 (大蔵神社 2)	444
P L. 25	大岩地区 (八幡神社 1)	445
P L. 26	大岩地区 (八幡神社 2)・(大北地藏堂)	446
P L. 27	車作地区 (法林寺 1)	447

P L. 28	車作地区 (法林寺 2)	448
P L. 29	車作地区 (法林寺 3)	449
P L. 30	車作地区 (法林寺 4)	450

Ⅸ. 石造物部門

P L. 1	大岩地区 (1)	469
P L. 2	大岩地区 (2)	470
P L. 3	大岩地区 (3)	471
P L. 4	大岩地区 (4)	472
P L. 5	大岩地区 (5)	473
P L. 6	大岩地区 (6)	474
P L. 7	大岩地区 (7)	475
P L. 8	忍頂寺地区 (1)	476
P L. 9	忍頂寺地区 (2)・桑原地区 (1)	477
P L. 10	桑原地区 (2)	478
P L. 11	桑原地区 (3)	479
P L. 12	桑原地区 (4)	480
P L. 13	桑原地区 (5)	481
P L. 14	桑原地区 (6)	482
P L. 15	桑原地区 (7)	483
P L. 16	桑原地区 (8)	484
P L. 17	桑原地区 (9)	485
P L. 18	桑原地区 (10)	486
P L. 19	桑原地区 (11)	487
P L. 20	桑原地区 (12)	488
P L. 21	桑原地区 (13)	489
P L. 22	桑原地区 (14)	490
P L. 23	桑原地区 (15)	491
P L. 24	桑原地区 (16)	492
P L. 25	桑原地区 (17)	493
P L. 26	桑原地区 (18)	494
P L. 27	桑原地区 (19)	495
P L. 28	車作地区 (1)	496
P L. 29	車作地区 (2)・生保地区 (1)	497
P L. 30	生保地区 (2)	498
P L. 31	生保地区 (3)	499
P L. 32	生保地区 (4)	500
P L. 33	大岩地区 八幡神社五輪塔	501

P L. 34	忍頂寺地区 No.85	忍頂寺五輪塔	502
---------	-------------	--------	-----

X. 民俗・芸能部門

図 1	生保地区	灌漑用水系概略図	507
図 2	大岩地区	大歳神社オトウ祭りの御供	510
図 3	車作地区	灌漑用水系概略図	517
図 4	桑原地区	地福寺境内詣墓 墓石配置平面図	531
表 1	車作地区	皇大神宮祭祀奉仕要領	504
表 2	生保地区	生保地区の神田・堂田一覧	507
表 3	桑原地区	地福寺境内両墓制詣墓の石塔銘および法量概数	532
P L. 1	桑原地区	地福寺境内詣墓（1）	533
P L. 2	桑原地区	地福寺境内詣墓（2）	534
P L. 3	桑原地区	地福寺境内詣墓（3）	535
P L. 4	生保地区	諏訪神社頭屋神事・車作地区 水利施設	536
P L. 5	安威地区	阿為神社 春の例祭	551

I. 総合調査の経緯と方法

第1章 安威川ダム建設事業経過

本総合調査の実施については、了解の得られた地区から調査を開始した。了解を得るにあたっては、大阪府安威川ダム建設事務所の協力を得た。したがって、同建設事務所に安威川ダム建設事業と経過についての概要報告をお願いした。

第1節 事業の目的

安威川ダム建設事業の主要目的として以下の3点をあげる。

- 1) 洪水調節：ダム地点の計画高水流量 720m³/sの内600m³/sの洪水調節を行う。
- 2) 水道用水の供給：水道用水として新たに7万m³/日を供給する。
- 3) 流水の正常な機能の維持：河川維持用水、農業用水を確保する。

第2節 事業の概要

- 1) ダムの諸元

表1 ダム本体

位 置	茨木市生保・大門寺地内
型 式	ロックフィルダム
堤 高	82.5m
堤 頂 長	368.5m
堤 体 積	265万m ³
ダム天端高	E L 137.5m

表2 ダムの貯水池

集 水 面 積	52.2km ²
湛 水 面 積	0.92km ²
総 貯 水 容 量	2,290万m ³
洪水調節容量	1,380万m ³
利 水 容 量	750万m ³
堆 砂 容 量	160万m ³

- 2) ダム関連事業

- ①府営水道浄水場
- ②付替道路（府道、市道）等

- 3) 補償概要

- 一般に対する補償 補償面積：約143ha
 移転戸数：69戸（関連事業による移転20戸，水没による移転49戸）
- 公共に対する補償 府道茨木亀岡線 他

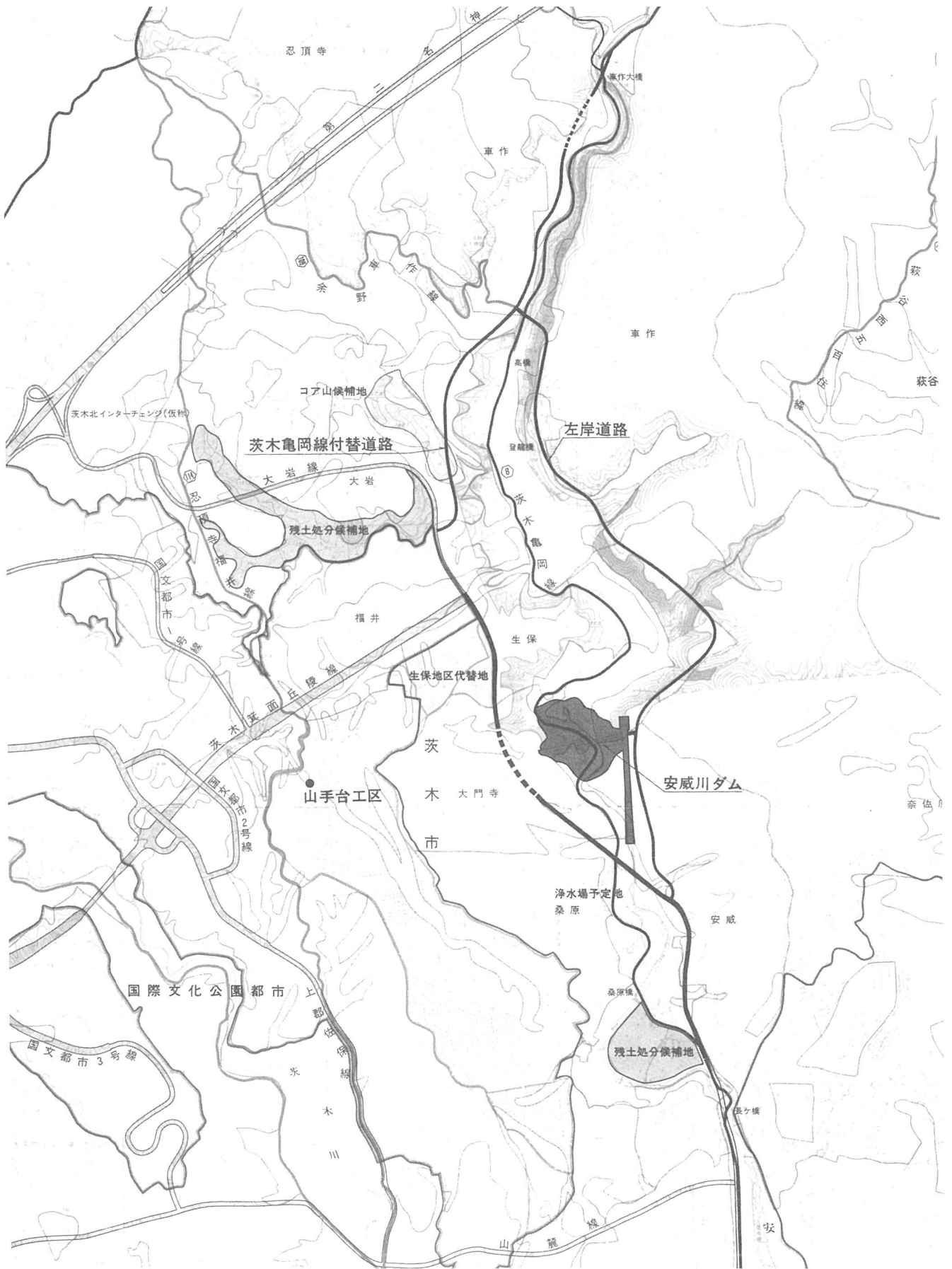
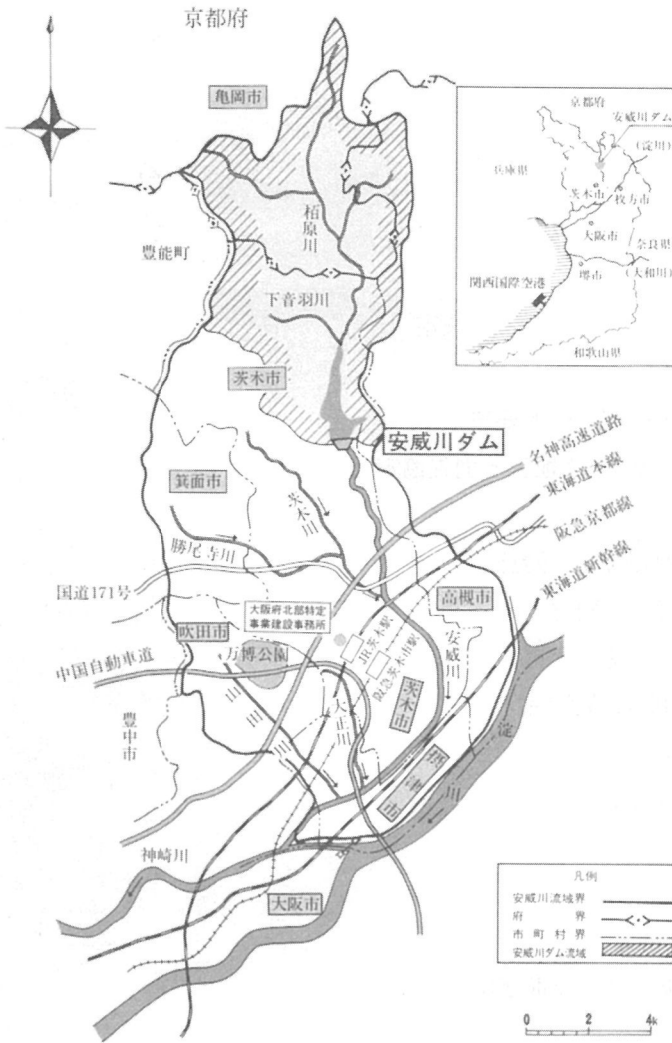
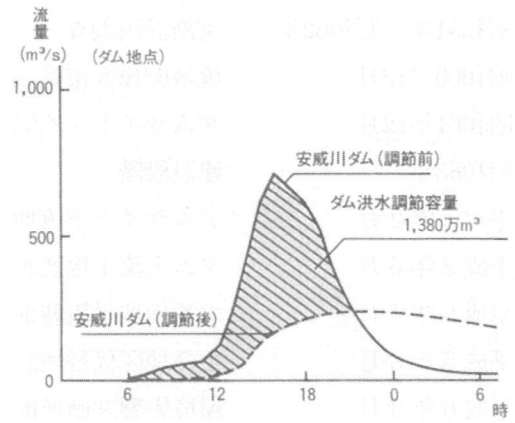


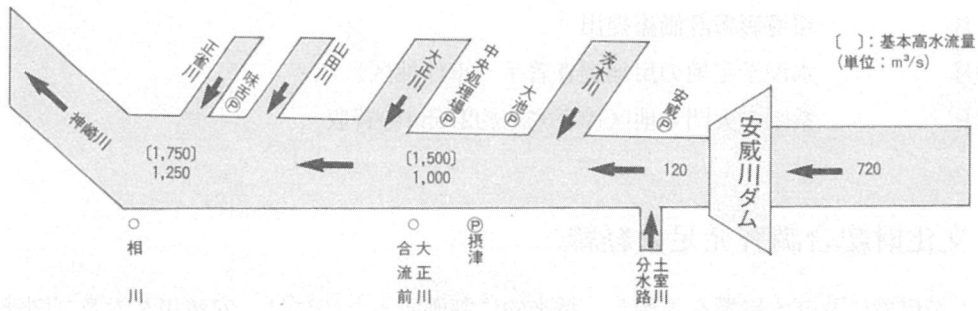
図1 安威川ダム全体計画(案)



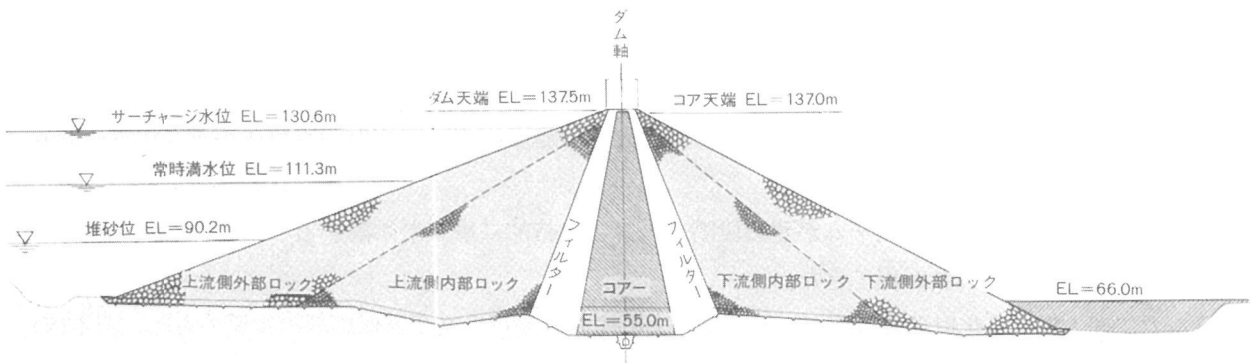
1. 安威川流域概略図



2. 洪水調節計画



3. 計画高水流量配分図



4. ダム標準断面図

図2 安威川ダム計画図

第3節 事業経過

昭和42年	北摂豪雨災害を契機にダム構想立案
昭和42年～昭和50年	予備調査
昭和46年	多目的ダム（治水、利水）とすることを決定
昭和51年～昭和62年	実施計画調査
昭和60年12月	流域関係5市長より知事へダム促進要望
昭和61年12月	ダムサイト（ダム敷になる地域）2地区と調査協定締結
昭和63年～	建設段階
平成元年2月	ダムサイト下流地区が調査着手に同意
平成2年6月	ダム上流1地区が調査着手に同意
平成5年1月	水源地域対策特別措置法に基づくダム指定
平成5年3月	生保地区代替地計約10.8haの買収完了
平成6年3月	環境影響評価準備書提出
平成7年3月	生保地区代替地造成工事着手
〃	生保地区基本協定締結
〃	桑原代替地一部買収（約0.2ha）
平成7年5月	車作地区代替宅地約2.5haの買収完了
平成7年12月	流域関係5市長より知事へダム促進要望
平成8年1月	車作地区基本協定締結
平成8年3月	車作地区代替宅地造成工事着手
平成8年5月	環境影響評価書提出
平成8年10月	水没予定地の用地調査着手（車作地区）
平成8年12月	桑原・大門寺地区代替宅地約2.5haの買収

第4節 文化財総合調査発足の経緯

安威川ダムが環境に及ぼす影響を予測し、将来的に評価するためには、安威川ダム及び関連事業で影響を受けるすべての地域を対象に、文化と自然の両側面から調査し、有形・無形を問わず地域の歴史・文化・自然などの記録資料を作成しておく必要がある。

このため大阪府安威川ダム建設事務所では、予備調査として昭和61年から63年まで安威川ダム建設予定地である生保・大門寺地区において文化財分布調査を実施し、主に文化財の資料収集及び現地確認等の調査を行った。

そして、昭和63年から安威川ダムが建設段階に入り、本格的に事業が始動することになり、文化財調査も詳細な調査を行う必要が出てきた。

そこで、(財)大阪府文化財調査研究センターは、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、茨木市・高槻市各教育委員会の協力を得て、学識経験者からなる安威川総合調査委員会を平成2年度に発足させ、平成3年度より調査の了解の得られた地区から次節のような流れで総合調査を実施した。

第5節 安威川総合調査事業経過

平成2年度	安威川総合調査委員会発足。調査方針・項目の検討。
平成3年度	調査の了解が得られている桑原・大岩地区において一部調査を除き調査実施。
平成4年度	桑原・大岩地区において了解の得られていなかった民家建築、社寺建築、民俗文化財についても了解が得られる。
平成5年度	車作地区において調査の了解が得られたため、予備調査を実施。
平成6年度	車作地区において調査実施。
平成7年度	生保地区において調査実施。
平成8年度	生保・車作地区において補足調査実施。 報告書作成。

第2章 総合調査に至る経緯

第1節 総合調査の契機

昭和42年の北摂豪雨災害を契機に安威川ダム構想が立案された。これに伴い建設に向けての各種調査が行われ、一環として、大阪府教育委員会（以下、「府教委」）による文化財の予備調査が実施された。ダム建設が今後の環境に及ぼす影響の判断材料として、地域の自然・歴史・文化の現状記録が必要であると考えられたからである。

大阪府教育委員会による「文化財調査」

昭和61年度に大阪府教育委員会文化財保護課（以下、「保護課」）によって、本総合調査に先立つ予備調査が行われた。実施されたのは、以下の3調査である。

1. 有形文化財・民俗文化財調査

〔調査年月日〕	昭和62年3月9日～31日
〔調査地〕	茨木市大字生保・大門寺
〔調査項目〕	民家建築・生業・年中行事・石造物・交通・交易

2. 埋蔵文化財調査

〔調査年月日〕	昭和62年3月20日～27日
〔調査地〕	茨木市大字生保・大門寺
〔調査項目〕	踏査、および踏査に先立つ聞き取り調査（石造物・みこし塚・集落や耕作地など）

3. 名勝・天然記念物調査

〔調査年月日〕	昭和62年3月30日
〔調査地〕	茨木市大字大門寺
〔調査項目〕	樹木などの踏査

第2節 総合調査の準備

府教委の本総合調査に対する具体的な準備は平成2年度から実施された。(財)大阪府文化財調査研究センター（以下、「センター」）による調査組織の発足までに次のような経緯があった。

1. 総合調査の打診

府教委からセンターに対する総合調査の打診があった。これによって、センターは、本総合調査に対する準備をはじめることになった。

2. 総合調査案の作成

府教委の意向を受け、平成2年10月、センターはまず、「文化財総合調査事業—安威川総合開発事業 安威川ダム建設に伴う文化財総合調査—」素案を作成、保護課に提出する。次に「安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査実施計画書」案、同「経費積算書」案を提出、保護課・大阪府河川砂防課と協議に入る。

3. 調査依頼の確認

平成2年11月、安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査（以下、「安威川総合調査」）の実施について大阪府土木部から府教委へ依頼があり、12月、府教委からセンターに実施についての通知が届く。同じく、大阪府安威川ダム建設事務所よりセンターあて総合調査の依頼が届く。

第3節 総合調査の開始

平成3年1月、センターは、現地調査の開始に向け、大阪府安威川ダム建設事務所と「安威川ダム文化財等総合調査委託」の契約を締結する。

平成3年1月より委員会運営案の作成と委員の選出が行われ、2月はじめに委員の委嘱要請が行われた。3月20日、「安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査委員会」の第1回調査委員会が開催され、本総合調査の開始となった。

第3章 総合調査の方法

第1節 調査期間

第2章で述べたように、調査の準備は平成2年度からはじめた。当初、平成3年度から2.5年間の現地調査を実施し、平成5年度末に報告書を作成、調査を完了するという計画であった。

しかし、ダム建設事業の進展にあわせ現地調査を実施した関係上、調査は平成7年度段階で着手した範囲で一旦終了し、平成8年度には一部で追加調査を行うとともに、「中間報告書」の作成にかかることになった。

第2節 対象地域

総合調査は、茨木市の東部山間を流下する安威川の中・下流域で、安威川ダム建設によって影響を受けると考えられる地域一帯を対象とする。この地域に所在する集落は、北から、車作（くるまつくり）・大岩（おおいわ）・生保（しょうぼ）・大門寺（だいもんじ）・桑原（くわのはら）・安威（あい）の6地区である。うち、車作・生保の各20数戸、大岩・大門寺の各1戸が水面下に消える予定である。生保は集落の全戸移転ということになる。

平成7年度までの段階で現地調査が着手できたのは、以上のうち、車作・大岩・生保・桑原の4地区である。したがって、本書での報告は、これら4地区を対象とするが、地元との調整が必要ではない調査（地理・地質・生物）については、安威川流域として大きな範囲での現地調査を実施した。また、地元調整が必要な調査（建造物・歴史・美術工芸品・石造物・民俗・芸能）のうち社寺建築は周辺部も含め、さらに、芸能関係の一部についても、安威地区が調査できたので今回報告に含めた。

第3節 調査内容

第1項 各分野の調査の名称

総合調査にあたって必要と考えられる調査の分類、呼称については、国の文化財指定基準の分類名称を基とした。

記念物Ⅰ（遺跡）	考古部門
記念物Ⅱ（名勝地）	地理部門
天然記念物Ⅰ（地質）	地質部門
天然記念物Ⅱ（動物・植物）	生物部門
有形文化財Ⅰ（建造物）	建造物部門
有形文化財Ⅱ（美術工芸品）	美術工芸品部門
有形文化財Ⅲ（歴史資料・古文書）	歴史部門・石造物部門
民俗文化財	民俗・芸能部門
無形文化財	〃

参考〔国の文化財指定基準による分類〕

(1)特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準

記念物Ⅰ（史跡）・記念物Ⅱ（名勝）・天然記念物Ⅰ（地質）・天然記念物Ⅱ（動物・植物）

(2)国宝及び重要文化財指定基準

記念物Ⅰ（考古資料）・有形文化財Ⅰ（建造物）・有形文化財Ⅱ（美術工芸品）

有形文化財Ⅲ（歴史資料・古文書）・有形文化財Ⅲ（書籍・典籍・金石文）

(3)重要有形民俗文化財指定基準

民俗文化財（民俗文化財）

(4)重要無形文化財の指定並びに保持者及び保持団体の認定の基準

無形文化財（無形文化財）

第2項 調査の内容

総合調査各分野に対する調査内容は、「安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査実施計画書」から抜粋する。

- | | |
|-----------|---|
| (1)記念物Ⅰ | 考古資料調査（遺跡・考古資料）
埋蔵文化財調査（分布調査・試掘調査・発掘調査） |
| (2)記念物Ⅱ | 名勝・水利・古地理調査・地形の変遷・歴史的景観・字名調査
微化石分析等の自然科学的調査による古環境の復元調査 |
| (3)天然記念物Ⅰ | 地質調査 |
| (4)天然記念物Ⅱ | オオサンショウウオの生息域の調査
昆虫・脊椎動物・鳥類・魚類など生物全般、植生・植物などの調査 |
| (5)有形文化財Ⅰ | 建造物調査（民家・社寺等の記録調査）
集落景観調査 |
| (6)有形文化財Ⅱ | 社寺および個人所蔵の美術工芸品調査 |
| (7)有形文化財Ⅲ | 歴史調査（古文書・古絵図・金石文資料などの調査） |
| (8)民俗文化財 | 民俗の現状調査（民俗全般の記録保存）
生業・信仰・年中行事・民具・農具・日常生活用具 |
| (9)無形文化財 | 芸能・演劇・音楽・工芸技術などの調査 |

第4節 総合調査委員会について

総合調査の実施にあたっては、センターを事務局とし、理事長坪井清足を委員長とする総合調査委員会を設置、各分野別に委員を委嘱することになった。

安威川総合調査委員会の構成

各委員の委嘱名、調査の名称、委員名、委員の所属・職名を表化する（表3）。

総合調査委員会の開催

発足当初より9回の総合調査委員会が開催された。平成3・4年度は半期ごとに開催されたが、その後は年度末に1回の開催となった。

各種研究会について

各分野の委員は研究会を組織し、調査の実施には調査員が分担した。また、本書の執筆も分担が行われた場合がある（表4）。

表3 安威川総合調査委員会構成表

委 嘱 名	調 査 名 称	委 員 名	所 属 ・ 職 名
委 員 長	記念物統括	坪井 清足	(財)大阪府文化財調査研究センター理事長
委 員	記念物Ⅰ 記念物Ⅱ 天然記念物統括 天然記念物Ⅰ 天然記念物Ⅱ 有形文化財統括 有形文化財Ⅰ 有形文化財Ⅱ 有形文化財Ⅲ統括 有形文化財Ⅲ 民俗文化財統括 無形文化財統括	田代 克己 高橋 学 那須 孝悌 井本 伸廣 西川 喜朗 林野 全孝 青山 賢信 吉原 忠雄 松尾 寿 藤澤 典彦 上井 久義 宇津木秀甫	帝塚山短期大学教授 立命館大学助教授 大阪市立自然史博物館学芸課長 京都教育大学教授 追手門学院大学教授 京都府立大学名誉教授 大阪工業大学教授 堺市博物館学芸課課長代理 島根大学教授 元興寺文化財研究所人文・考古学研究室室長 関西大学教授 宇津木文化財研究所所長
顧 問		藤澤 一夫 原口 正三	四天王寺国際仏教大学名誉教授 甲子園短期大学教授
調査指導		河原 純之 岡村 道雄	文化庁記念物課主任調査官（平成2～4年度） 文化庁記念物課主任調査官（平成5～8年度）
指導助言		橋内 信昌 亀岡 勝敏 田中 宏 鹿野 一美 山田 雅敏 吉川 廣信 小路 行嗣 鳥越 仁道 森川 久男 富成 哲也	大阪府教育委員会文化財保護課課長（平成2・3年度） 大阪府教育委員会文化財保護課課長（平成4・5年度） 大阪府教育委員会文化財保護課課長（平成6・7年度） 大阪府教育委員会文化財保護課課長（平成8年度） 茨木市教育委員会社会教育課課長（平成2・3年度） 茨木市教育委員会社会教育課課長（平成4～7年度） 茨木市教育委員会社会教育課課長（平成8年度） 高槻市教育委員会社会教育課課長（平成2・3年度） 高槻市教育委員会社会教育課課長（平成4年度） 高槻市教育委員会 高槻市立埋蔵文化財センター所長（平成5～8年度）
事務局		廣瀬 智生 河島 潔	(財)大阪文化財センター専務理事（平成2・3年度） (財)大阪文化財センター専務理事（平成4～6年度） (財)大阪府文化財調査研究センター 専務理事（平成7年度）・副理事長（平成8年度）

表 4 各種研究会調査員

調査名称	研究会名称	調査員（*：本報告書執筆者のみ所属名記載）
記念物Ⅰ	埋蔵文化財研究会	大島祥子
記念物Ⅱ	環境情報研究会	青木哲哉・徳安浩明・木谷幹一・牧田 令 高橋和子・江角龍典・田中徳子・新田拓子 辻内茂余
天然記念物統括	天然記念物研究会	*橋田俊彦 (株)日本エアロビデオ 柴田保彦・樽野博幸・石井久夫・川端清司 ・藤井伸二・布谷知夫
天然記念物Ⅰ	安威川天然記念物Ⅰ研究会	*楠 利夫 同志社中学校教諭（非常勤） *小原正顕 京都教育大学大学院生
天然記念物Ⅱ	天然記念物Ⅱ研究会	加村隆英・金野 晋・榎本岳史
有形文化財統括	安威川建造物研究会	*大場 修 京都府立大学助教授
有形文化財Ⅰ	安威川社寺建築調査研究会	東野良平・二宮義信・柳田智弘・妻木宣嗣
有形文化財Ⅱ	安威川美術工芸品調査会	
有形文化財Ⅲ統括	有形文化財Ⅲ研究会	*福山 昭 大阪教育大学教授 *福留照尚 茨木市文化財保護審議会委員 乾 宏巳
有形文化財Ⅲ	安威川金石文研究会	岡本広義・高橋平明・牧 伸行・杉浦隆支
民俗文化財統括	安威川民俗研究会	伊藤信明・佐々木康人・森本一彦・矢田直樹
無形文化財統括	安威川無形文化財研究会	



図3 調査地周辺図

表5 行政区の変遷 (出典:『大阪府の地名I』日本歴史地名大系第28巻 平凡社 1986)

集落	古代	中世	近世	近代以降		
車作	平安時代～ 京都仁和寺領 荘園	京都仁和寺領 忍頂寺五ヶ庄 のうち 寺辺村	慶長10 (1605)「摂津国絵図」車作村・清水村 (五ヶ庄3,763石9斗8升5合内) 元和初年「摂津一国高御改帳」(五ヶ庄3,763石余内) 幕府領(大和小泉藩片桐貞隆預) 寛永～正保期(1624～48)「摂津国高帳」車作村清水村 京都所司代板倉重宗知行地 高373石余 慶安2 (1649)～幕末 高槻藩永井直清領	明治5 車作村	明治22 見山村	昭和30 茨木市
大岩			慶長10 (1605)「摂津国絵図」大岩村・国見村 (五ヶ庄3,763石9斗8升5合内) 元和初年「摂津一国高御改帳」(五ヶ庄3,763石余内) 幕府領(大和小泉藩片桐貞隆預) 寛永～正保期(1624～48)「摂津国高帳」高323石余 京都所司代板倉重宗知行地 慶安2 (1649)～幕末 高槻藩永井直清領	明治5 大岩村	明治22 石河村	
生保			慶長10 (1605)「摂津国絵図」庄保村 (五ヶ庄3,763石9斗8升5合内) 元和初年「摂津一国高御改帳」(五ヶ庄3,763石余内) 幕府領(大和小泉藩片桐貞隆預) 寛永～正保期(1624～48)「摂津国高帳」村高114石余 京都所司代板倉重宗知行地 慶安2 (1649)～幕末 高槻藩永井直清領	明治5 生保村		
大門寺			慶長10 (1605)「摂津国絵図」大門寺 (五ヶ庄3,763石9斗8升5合内) 元和初年「摂津一国高御改帳」(五ヶ庄3,763石余内) 幕府領(大和小泉藩片桐貞隆預) 寛永～正保期(1624～48)「摂津国高帳」村高53石余 京都所司代板倉重宗知行地 慶安2 (1649)～幕末 高槻藩永井直清領	明治5 大門寺 村		
桑原	「新撰姓氏録」 桑原史の 本貫地か	安威庄 九条家領	慶長10 (1605)「摂津国絵図」桑原・桑原村 526石3斗 元和初年「摂津一国高御改帳」安威庄・桑原 526石3斗 幕府領(北見勝忠預) 寛永10 (1633)～慶安2 (1649) (安威村のうち桑原村) 山城勝竜寺藩永井直清領 慶安2 (1649)～承応3 (1654) 幕府領(※安威村に含む) 承応3 (1654)～幕末 桑原村として独立 170石余 旗本中川勘三郎(敷忠カ)領のうち	明治5 桑原村		
安威	「和名抄」 島下郡安威郷		慶長10 (1605)「摂津国絵図」安威村1,000石 元和初年「摂津一国高御改帳」(※桑原を含む) 幕府領(北見勝忠預)あい村・十日市村 1,000石 幕府領(片桐貞隆預)安威庄・桑原 526石余 寛永10 (1633)～慶安2 (1649) 安威村 1,531石余 山城勝竜寺藩永井直清領(※桑原を含む) 慶安2 (1649)～承応3 (1654) 幕府領(※桑原を含む) 承応3 (1654)～幕末 旗本深津正貞領(500石)・旗本中川忠幸領(500石) 他は幕府領 ※安威村本村…享保20 (1735)「摂河泉石高調」 旗本深津正房領(300石)・旗本深津元義領(200石) 旗本中川勘三郎(敷忠カ)領(172石余) 大坂城代太田資晴領(352石余)に分かれている。 ※両深津領・中川領(桑原村含む)は幕末まで継承される。 ※また、上記幕府領も以下の変遷がある。 明暦2 (1656)～寛文8 (1668) 京都所司代牧野親成領 寛文8 (1668)～享保19 (1734) 幕府領へ 享保19 (1734)～元文5 (1740) 大坂城代太田資晴領へ 宝暦12 (1762)～下総古河藩領へ。幕末まで続く。	明治5 安威村		昭和29 茨木市

II. 考古部門

はじめに

安威川流域は、茨木市の丘陵地の東側部分に位置する。しかし、この流域のみで記念物（埋蔵文化財）関係の歴史的環境が完結しているわけではない。周辺部を含めた地域、大阪府下、あるいは近畿地方といった広範囲の地域の中で、安威川流域の記念物も形成されているわけである。

したがって、本稿は安威川流域の遺跡を対象とはするが、茨木市を中心に、吹田市、摂津市、高槻市、島本町といった淀川右岸の、古くから「三島」と呼ばれる地域も含めるようにした（図1）。

第1章 安威川流域の遺跡

第1節 旧石器時代の遺跡（図2）

人類が地球上に登場したのは約400万年位前と考えられている。猿人、原人、旧人、新人の順に進化した。新人の活動は、時代が新しくなるに従い、日本各地でその生活痕跡が発見されるようになった。これらの年代は約3～4万年前と考えられている。

安威川流域ではこの時代に属する遺跡の発見はない。しかし、三島地域全体でみれば、大阪府下の他地域に比較して良好な遺跡が発見されている。これらの遺跡の大半は、段丘と丘陵部に分布している。いずれも、始良Tn火山灰降下（約22,000年前）以降のもので、後期旧石器時代に属するものである。

比較的まとまった遺物を出土する遺跡は、郡家今城遺跡A地点、郡家今城遺跡C地点、津之江南遺跡、郡家川西遺跡、継体陵北遺跡、塚原遺跡などがある。

これらの遺跡の出土石器は、いずれも大阪府南河内郡太子町の二上山周辺で採取されたサヌカイトの剥片・碎片をかなり含んでいることから、その生活範囲は広範囲であると推測されている。これらの遺跡からは、いずれも、生活遺構と推測される礫群遺構が発見されている。多くの剥片・碎片のサヌカイト集積は、生活場所の痕跡を示している。また、周辺の丘陵部や平野部では、石器が単独で発見される例も多く、これらは旧石器人が狩猟に利用したものと考えられている。

安威川流域にもっとも近い生活遺跡としては、塚原遺跡が注目される。多くの石器が出土し、その中でもナイフ型石器は、三島地域での代表的な形態として捉えられている（図4）。また、ホルンフェルス製の握斧も採集されている（図3）。安威川には花崗岩などに混じってホルンフェルスを見つけることができる。表面は風化して白色になっているものが多いが、割ると紫系統の黒色を呈し、鋭い割れ口になる。粒子は粗く、鋭利な細工を必要とする石器には向かないかも知れないが、大型の打製石器の材

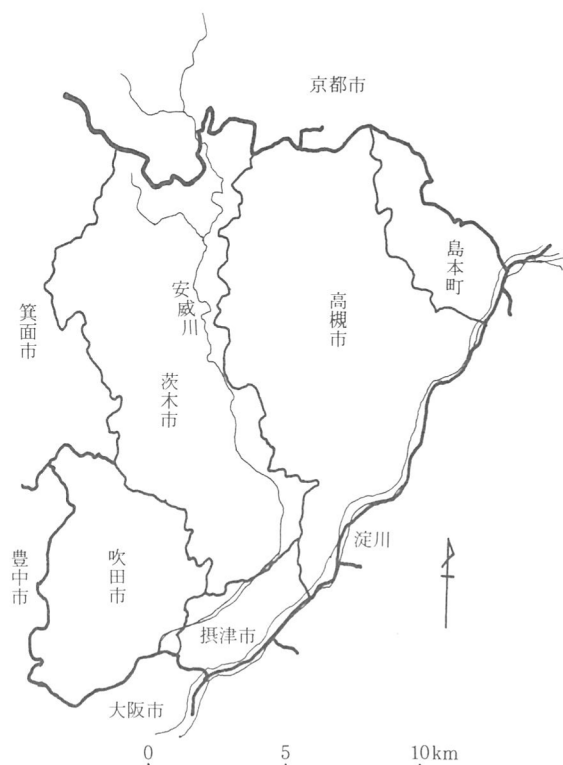


図1 三島地域図

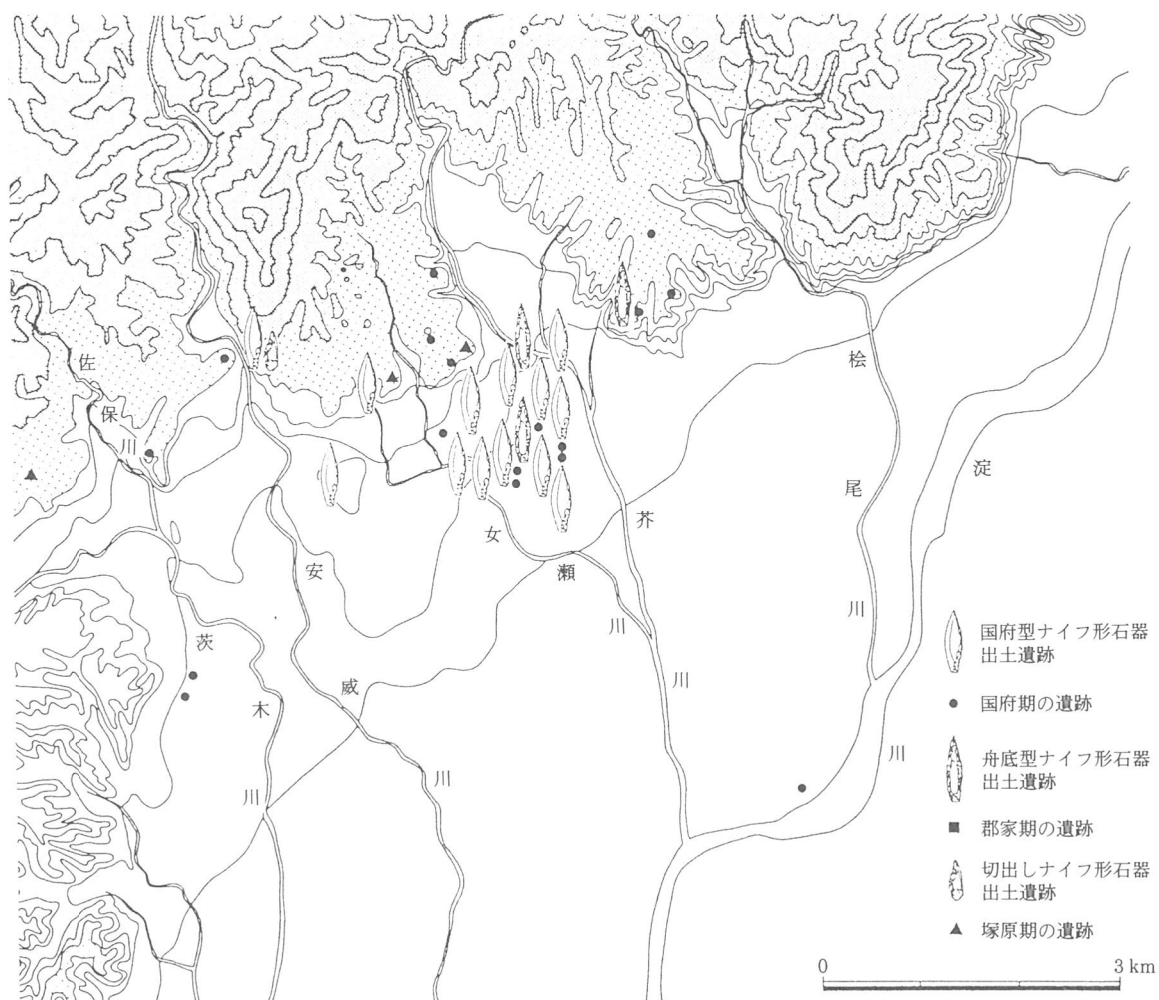


図2 三島平野の旧石器時代遺跡分布図（高槻市教育委員会『新池』1993）

料としては十分に耐え得るようである。

その他、石器の採集地として初田遺跡が知られている。

第2節 縄文時代の遺跡（図5）

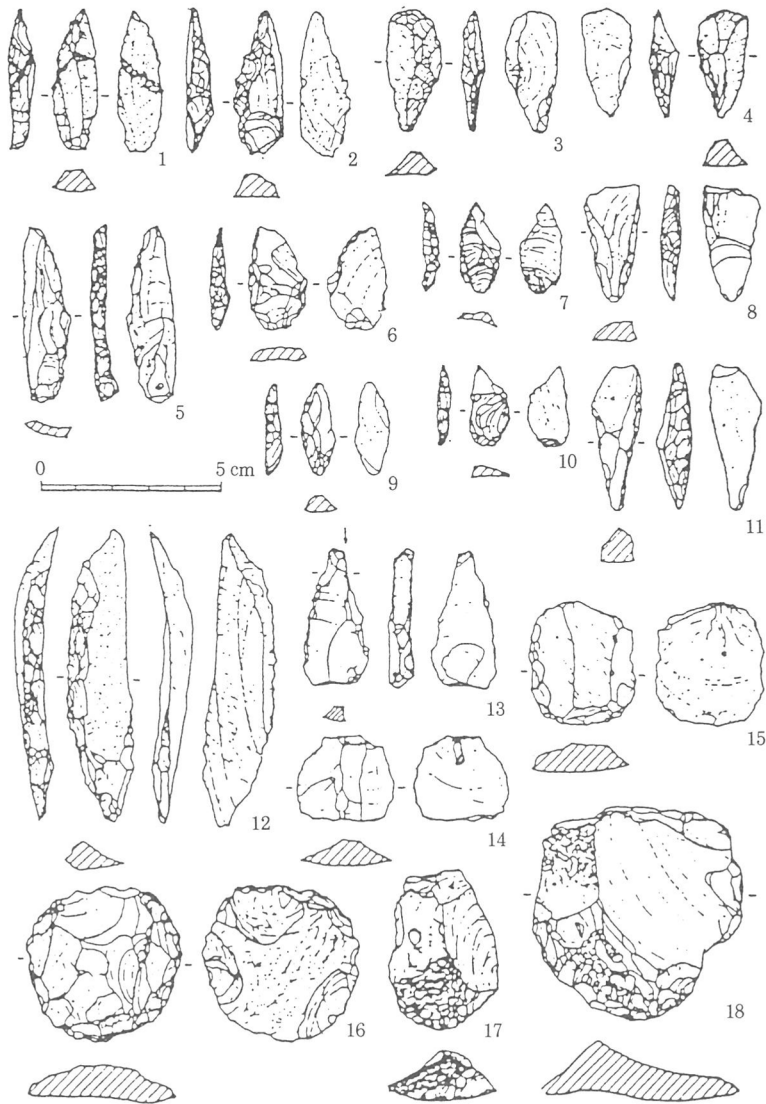
今から約10,000年前から日本の各地で石器の利用と併せて土器を焼くようになり、大きな生活の変化が起った。土器の文様から縄文時代と呼ばれている。

安威川流域では、やはり、この時期の明確な遺跡は発見されていない。しかし、三島地域周辺でみれば、遺跡の発見は最近多くなった。

縄文時代草創期・早期の遺跡では、淀川の自然堤防上に位置する高槻市大塚遺跡、丘陵段丘上に位置する吹田市吉志部遺跡がある。吉志部遺跡では有舌尖頭器と呼ばれる石器が数多く発



図3 塚原遺跡出土握斧
（『高槻市史』第1巻 1979）



(1~12 ナイフ形石器、13 彫器、14 縦剥ぎ剥片、15~18 擡器)
 図4 塚原遺跡出土旧石器 (『高槻市史』第1巻 1979)

見されているのが注目される。縄文時代前期・中期の遺跡では、大塚遺跡と同様な立地である高槻市柱本遺跡や、丘陵縁辺部で若干の遺跡が知られている。

縄文時代後期になると、発見される遺跡の数は増加する。丘陵上や段丘上などに遺跡が認められる。本安威川流域においても、初田遺跡で土器の出土が確認されている。周辺の西福井遺跡、太田遺跡にも同様に土器の出土が確認されている。

第3節 弥生時代の遺跡 (図7)

紀元前数百年前に中国大陸・朝鮮半島から水稲耕作の技術が日本にもたらされた。集落としての規模が大きくなり、遺跡の発見も明確になる。

三島地域も、淀川流域の低湿地一帯に集落が広がることが、現在までの調査でよくわかってきている。中でも、高槻市安満遺跡、茨木市東奈良遺跡は、大規模遺跡で知られている。いずれも、弥生時代前期



図5 三島平野の縄文時代遺跡分布図（高槻市教育委員会『新池』1993参照）



図6 東奈良遺跡出土鑄型拓影
（財大阪文化財センター他
「文化財講座 シンポジウム 銅鐸」1977より抜粋）

から継続して生活が営まれ、近畿地方の弥生時代遺跡としての良好な資料となっている。

東奈良遺跡は、大規模な濠や多くの建物跡、多数の方形周溝墓など多様な遺構が検出され、さらに多量の弥生土器、石器、木製品の出土があり、銅鐸の鑄型の発見で有名である（図6）。金属製品の製作工房があったことが裏付けられる。

安威川流域やその周辺部では、東奈良遺跡から少し遅れて集落が営まれたようである。弥生時代前期後半の耳原遺跡、郡遺跡、中期では、塚原遺跡、中期後半では太田遺跡、後期では安威遺跡、宿久庄遺跡などがある。その他、小規模な集落か遺物の散布地として將軍山遺跡、庄本遺跡、国見遺跡などがある。

第4節 古墳時代の遺跡と古墳（図8）

三島地域では、大小多くの古墳が確認され、その数はおよそ350基にのぼる。



図7 三島平野の弥生時代遺跡分布図（高槻市教育委員会『新池』1993参照）

これらの古墳の中で一番古いのは、高槻市弁天山古墳群である。將軍車塚古墳、前塚古墳、茨木市では紫金山古墳、將軍山古墳、安威1号墳があとに続く。

中期になると、墓谷古墳群、尼ヶ谷古墳群、石山古墳、土保山古墳、番山古墳のほか、巨大な古墳である太田茶臼山古墳（現、継体天皇陵）がある（写真1）。この巨大古墳は、当時の三島地方の首長層が強力な力を持っていたことを示す。

後期になると、今城塚古墳を初めとし（写真2）、安威古墳群、桑原古墳群、大門寺古墳群など各所に古墳がつくられる。後半の古墳として初田古墳群があり、最終末期のものには阿武山古墳がある（写真3・図9）。これら古墳のほか、丘陵端部には集落跡がある。

三島地域の主要古墳

- (1) 將軍山古墳 全長約110m、後円部の径約84m、高さ約14m、前方部の幅約48m、高さ7m。三段築成。墳丘に葺石が残り、埴輪が立てられていた。後円部中心に板状割石を小口積みした竪穴式石室があり、その内部より硬玉製勾玉6個、硝子製小玉4個、碧玉製鏃1個、銅鏃16個、鉄鏃50個、鉄剣7口、鉄刀1口、短甲片、釣り針などの副葬品が出土している。

(2)安威古墳群

阿為神社が鎮座する花園山一帯に分布する古墳群である。本古墳群は、前方後円墳を含んでいる。後期の横穴式石室の古墳が大半で、20数基から成り立っている。

安威0号墳

墳丘の径が約15mの円墳と考えられる。内部の主体部に粘土槨が2基、検出されている。1号粘土槨の現存長2.7m、幅0.8m、2号粘土槨の現存長約2.0m、幅0.8m、いずれも割竹形木棺である。出土遺物として、1号粘土槨からは斜縁一仙五獣鏡1面、勾玉1個、管玉17個、小玉10数個、鉄製工具類（鎌・斧・ヤリガンナ・刀子）、また、2号粘土槨からは、平縁四獣鏡1面、勾玉9個、管玉30個、丸玉48個、小玉76個、

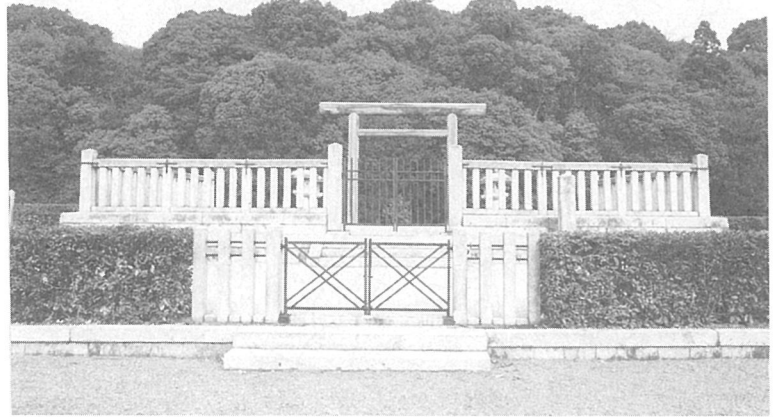


写真1 継体天皇陵前方部



写真2 今城塚古墳の前方部と濠



写真3 阿武山古墳全景

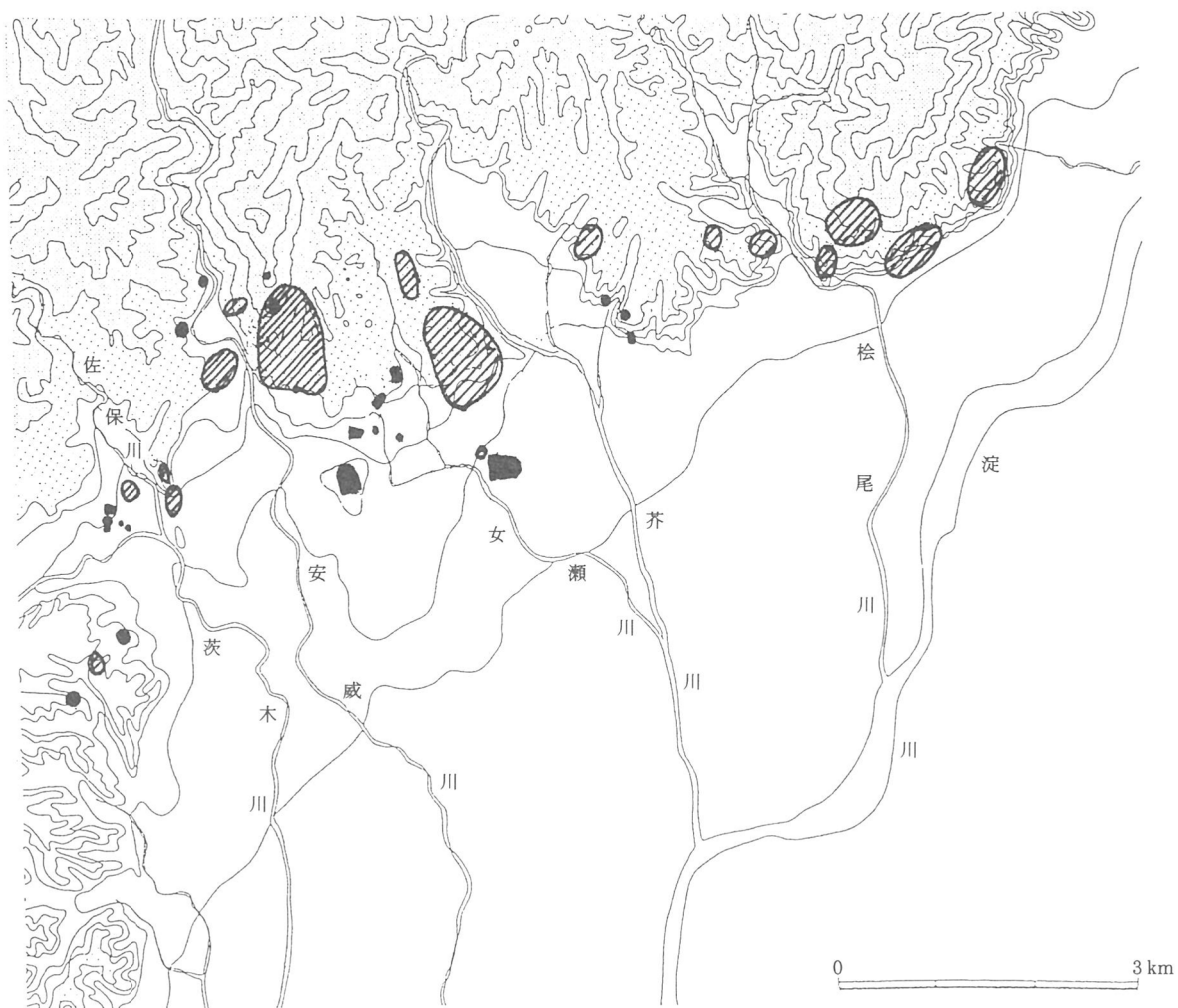


図8 三島平野の古墳分布図

甕玉1個、石釧2個体分、鉄製工具類が検出された。

- 安威1号墳 全長45m、後円部の径30mの前方後円墳である。葺石が残り、土器列がある。主体部は粘土槨が2基検出されている。1号粘土槨は、長さ8m、東幅1.9m、西幅1.3mであり、2号粘土槨は、長さ5m、幅0.7mを測る。いずれも割竹形木棺を入れる。副葬品は石釧、車輪石、鍬形石、土師器、漆塗盾が出土している。
- (3)太田茶臼山古墳 現、継体天皇陵である。全長226m、後円部の径138m、高さ19.2m、前方部の長さ117m、幅147m、高さ19.8m、幅28~33mの周濠を巡らす。くびれ部両側に長さ3.5m、幅4.5mの造りだしを設ける。外堤に埴輪列を巡らす。
- (4)初田1号墳 墳丘の高さ2.5m、一辺約10mの方形墳である。主体部は輓敷の横穴式石室で、これは天井に漆喰を使用している特異な石室である。
- (5)大門寺古墳群 大門寺集落の北西約500mほどの山頂に2基の古墳が所在することは、古くより知られている。そのうち1基は横穴式石室である。玄室長さは7.5m、幅1.45mを測る。天井石は4石があるが、副葬品は不明である。他の古墳は詳細不明である。
- (6)阿武山古墳 古墳時代のものではないが、古墳として本項に含める。
墳丘半径41m、花崗岩と輓で造られた石室（半地下式）は内部に漆喰が塗られ、

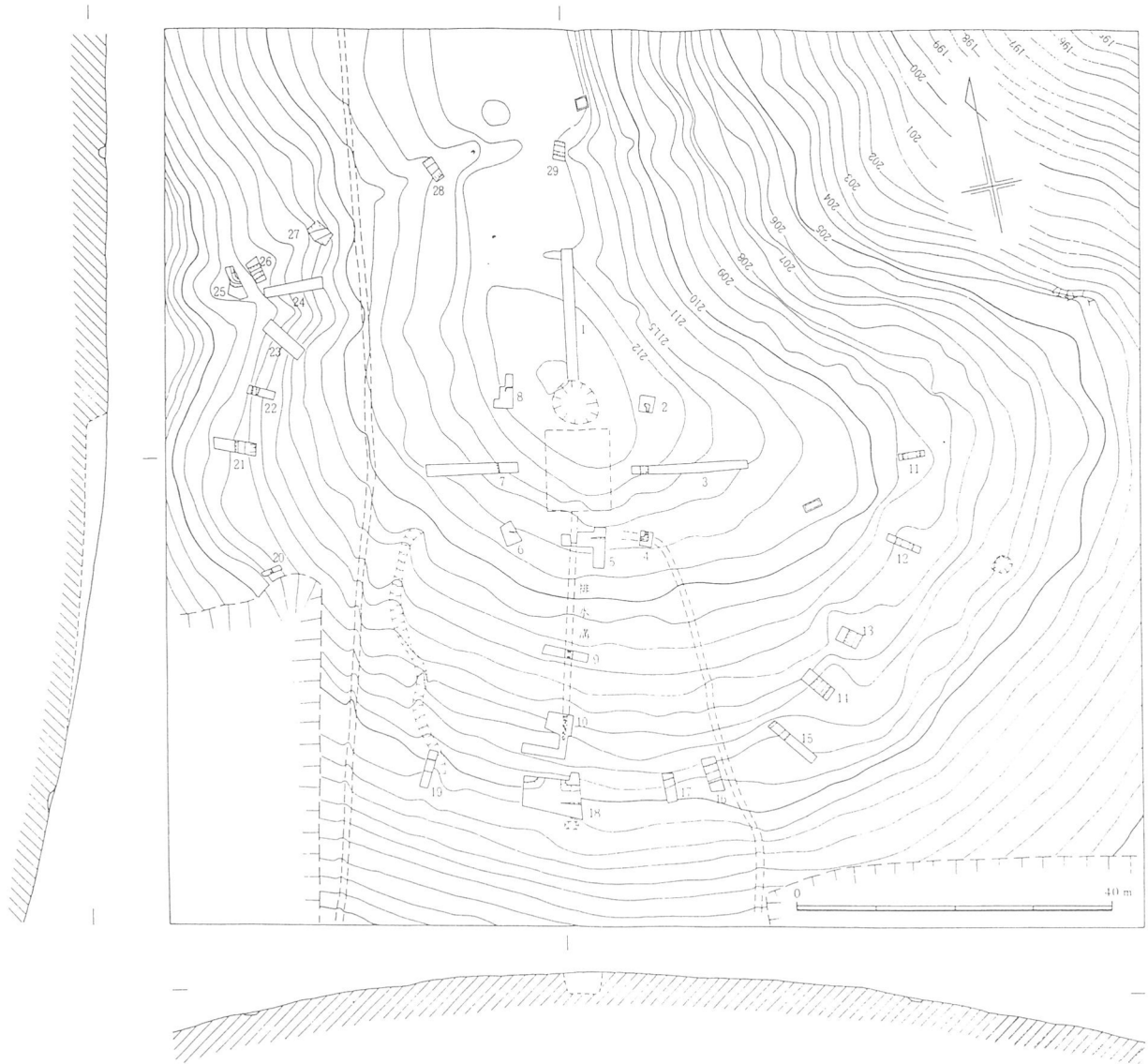


図9 阿武山古墳墳形図（高槻市教育委員会『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・7』1983）

長さ2.6m、幅1.1m、高さ1.1mを測る。石室中央の甄築棺台の上に、長さ2m、幅0.6m、高さ0.5mの夾紵棺が安置され、棺内には、玉枕、金糸をまとった推定年齢60才前後の男性遺体が仰臥伸展葬されていた。このような古墳が造られることは、本地域が古代において非常に重要な地域であったことを示している。

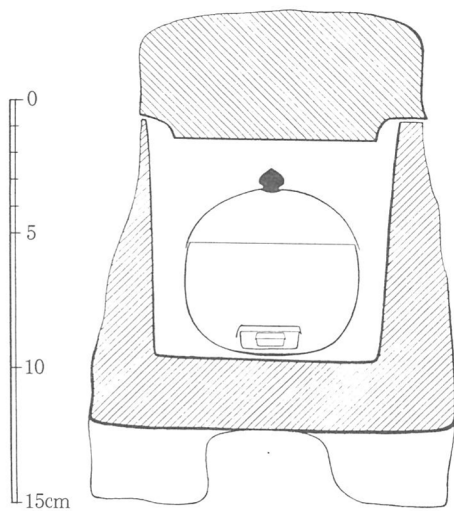


図10 太田廃寺出土舍利容器皿（『茨木市史』1969）

第5節 古代以降の遺跡

大化の改新以降は、律令制に基づく政治で、丘陵端部から平野部にかけて古代の土地区画整理が行われた。これら条里制は、安威川流域にも及んでいる。

また、この時代は朝鮮半島から仏教が伝えられ、この



図11 清水廃寺・みこし塚伝承地



写真4 太田廃寺跡の現況



写真5 安威砦遠景

地においても寺院が建立される。古くは、上穂積の周辺部で火災にあった古代の瓦の出土が知られている（穂積廃寺）。その後の調査で、この寺院跡から白鳳期の蓮華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦が出土している。

中臣太田連と関連づけられている太田廃寺は、明治40年、太田茶臼山古墳の南で開墾中に舍利容器一具を納めた塔心礎が発見されたことから存在が確実になった（写真4）。舍利容器は、大理石製で、中には有蓋銅碗があり、銀盒、そのさらに中には金盒が納められていた（図10）。この塔心礎近くからは、飛鳥時代後期や再建法隆寺の系譜をひく文様をもつものなど数形式の瓦が出土している。

平安時代前期には総持寺、忍頂寺が創建されている。大門寺も「大門寺一切経」奥書によって平安時代の建立が確認されている。また、同時代から存在する寺院遺跡として、車作地区の山間部に清水廃寺跡がある（図11）。平安時代の存在は、「西方寺蔵一切経」によってわかっている。堂宇の痕跡などはあまり明確ではないが、平安時代後期、鎌倉、室町の各時代の瓦が地元研究者によって採集されている。創建の経緯などは不明である。しかし、平安時代後期に隆盛をみる山岳寺院の一つと推定できる。

中世から近世にかけての城跡として茨木城（茨木市片桐町）、福井城（茨木市福井）、泉原城（茨木市泉原）、佐保城（茨木市佐保）、城山（茨木市佐保、庄ノ本）、クルス山砦（茨木市佐保）、高槻城、太田城とともに、安威砦跡が知られている（写真5）。

第2章 分布調査報告

今回の事業予定地については、表面観察として分布調査を実施した。しかし、踏査できる範囲が限られていたので、十分な成果をあげることが出来なかった。

周辺の文化財分布状況や、第1章で述べたような遺跡の状況から推測しても、さらなる調査が必要と認められるので、条件が整えられ次第、再調査を実施されたい。

第1節 分布調査の成果

残土処分のための盛り土予定地である大岩地区および桑原地区の分布調査を行う。

大岩地区

盛り土予定地の東側半分が調査の可能地であった。山林、水田、いずれの地域においても土器などの散布は確認できなかった。

生保地区

集落の東側、安威川を隔てた右岸に、東の山塊から安威川に向って延びた段丘が認められる。水田として利用されており、分布調査では、土器や石器などは採集し得なかったが、縄文時代の遺跡が存在する可能性はかなり高いと予想される。まず、試掘調査を実施して確認する必要がある。

桑原地区

桑原地区の東で山間部を出た安威川はさらに南流し、安威の丘陵に突き当たった後に流路を大きく東に変える。そして、阿武山と安威丘陵に挟まれて極端に狭くなった長ケ淵をへて三島平野に流れ出る。この大きく蛇行する安威川と、北東部の安威山に囲まれた平坦地を踏査する。土器などの散布は確認できなかった。

安威川が堆積した砂や礫で形成された扇状地であり、埋蔵文化財だけでなく、地理、地質学等の立場からでも試掘調査が必要であろう。

第2節 聞き取りによる成果

生保地区では、諏訪神社の神輿を対岸の尾根に埋めたという伝承があり、埋めた場所はミコシ塚と呼ばれている（図11）。尾根の山頂は比較的平坦で、人為的に整地されたような様子がある。しかし、古墳であるとの確証は得られなかった。



图12 安威川流域周辺文化財分布図

安威川流域周辺文化財分布図（大阪府教育委員会作成分布図1990年度による）

番 号	文 化 財 名	種 別	年 代
1	下鳥羽キリシタン遺跡	墳墓	江戸
2	高雲寺キリシタン墓碑	墳墓	江戸
3	忍頂寺石造五輪塔	建造物	鎌倉
4	千提寺キリシタン遺跡	墳墓	江戸
5	泉原遺跡	集落跡	
6	国見遺跡	遺物散布地	弥生
7	佐保の石槽	考古資料	鎌倉～室町
8	佐保城跡	城跡	
9	庄本遺跡	遺物散布地	弥生
10	佐保城跡	城跡	
11	佐保の石槽	考古資料	鎌倉～室町
12	クルス中世墳墓	墳墓	鎌倉～室町
13	佐保栗栖山砦跡	砦跡	
14	大門寺古墳群	円墳	古墳
15	地福寺五輪石塔	建造物	
16	桑原古墳群	群集墳	古墳
17	初田2号墳	円墳	古墳
18	初田1号墳	円墳	古墳
19	安威砦跡	砦跡	
20	安威古墳群	群集墳	古墳
21	安威寺跡	寺跡	
22	福井城跡	城跡	
23	西福井遺跡	集落跡	弥生～古墳
24	新屋古墳群	群集墳	古墳
25	真龍寺古墳群	群集墳	古墳
26	將軍山古墳群	群集墳	古墳
27	安威城跡	城跡	室町
28	安威遺跡	集落跡	弥生～古墳
29	大日寺跡	寺跡	平安
30	安威西垣内遺跡	集落跡	弥生
31	紫金山古墳	前方後円墳	古墳
32	青松塚古墳	円墳	古墳
33	南塚古墳	前方後円墳	古墳
34	海北塚北方遺跡	集落跡	古墳
35	海北塚古墳	円墳	古墳
36	畠摺古墳	方墳	古墳
37	耳原古墳	円墳	古墳
38	宿久庄西遺跡	集落跡	弥生
39	宿久庄遺跡	集落跡	弥生
40	耳原遺跡	集落跡	縄紋～弥生
41	継体天皇陵	前方後円墳	古墳
42	太田城遺跡	城跡	室町
43	太田遺跡	集落跡	弥生～室町
44	太田庵寺跡	寺跡	奈良
45	阿武山1号墳	円墳	古墳
46	片ヶ谷古墳群	群集墳	古墳
47	阿武山古墳	円墳	古墳
48	塚原古墳群	群集墳	古墳
49	上土室遺跡	墳墓群	古墳～鎌倉
50	土室遺跡	集落跡	古墳～奈良
51	番山古墳	前方後円墳	古墳
52	二子山古墳	前方後円墳	古墳
53	土保山古墳	円墳	古墳
54	高樋古墳	方墳	古墳
55	關鷄山古墳	前方後円墳	古墳
56	氷室瓦器散布地	遺物散布地	中世
57	關鷄野古墳	円墳	古墳
58	観音寺	寺跡	永祿
59	城山城跡	城跡	室町
60	塚脇古墳群	群集墳	古墳
61	下ノ口古墳群	群集墳	古墳
62	塚穴古墳群	群集墳	古墳
63	墓谷古墳群	群集墳	古墳
64	宮之川原遺跡	集落跡	古墳～歴史
65	殿岡神社古墳	円墳	古墳
66	弁天山古墳群	前方後円墳・円墳	古墳
67	岡本山古墳群	墳墓群	奈良～室町
68	上野遺跡	集落跡	弥生
69	前塚古墳	前方後円墳	古墳
70	上氷室遺跡	集落跡	古墳
71	狐塚古墳群	方墳・円墳	古墳
72	今城塚古墳	前方後円墳	古墳
73	氷室塚古墳	前方後円墳	古墳
74	ツゲノ遺跡	集落跡	古墳～歴史
75	氷室遺跡	集落跡	古墳
76	郡家今城遺跡	集落跡	旧石器～平安
77	宮田遺跡	集落跡	縄紋～鎌倉
78	將軍山第2地点遺跡	土壇墓	弥生
79	將軍山第1地点遺跡	土壇墓	弥生
80	新池遺跡	集落跡	奈良
81	新池埴輪生産跡	工房跡	古墳

III. 地理部門

はじめに

環境情報研究会では、安威川流域の地形環境、土地利用、地名、土地開発などについて調査し、自然環境と人間との関わりについて検討した。いっけん変化しないようにみえる自然環境も決して不変ではない。むしろさまざまな時間スケール、空間スケールで変化している。このような自然環境の変化が人間の活動にどのような影響をおよぼしたのであろうか検討した。他方、人間は一方的に自然環境の影響を受けるだけでなく、自然環境を変化させるファクターでもある。このような観点からも検討を加えた。

第1章 調査方法

調査にあたっては次のようなことを実施した。

- 1) 人工衛星データ画像処理
- 2) 航空写真解析
- 3) 地形図の作業および読図
- 4) デジタルエレベーションモデルの画像処理
- 5) 地形調査
- 6) 地名調査
- 7) 土地利用調査
- 8) 水利調査 など

第2章 近畿地方レベルでみた安威川流域

第1節 山地

安威川流域を日本列島レベルで見た場合、地質学的には西南日本内帯に位置している。また、気候は、瀬戸内区に属し、植生は本来、カシ、シイ、クスなどの常緑広葉樹が卓越する地域である。

もう少し詳しく地方レベルでみた場合、安威川流域は近畿トライアングルと呼ばれる地域に分類される。近畿トライアングルは、日本列島を外帯と内帯に分ける大断層である中央構造線を底辺とし、福井県敦賀市付近を頂点とする三角形の地域である（巻頭図版2-2参照）。この地域は、日本列島の中でも特に活断層が集中する地域である（図1参照）。1997年1月17日に発生し、淡路島や神戸市周辺に死者6000名を超える被害をもたらせた兵庫県南部地震は、この地域の地質学的特徴を極めてよく反映したものであった。

大局的に見るならば、近畿トライアングルの地域では、山地と盆地・平野・海が、順序よく東西に配列している。西から順に淡路島、大阪湾、上町台地、河内平野、生駒山地、奈良盆地、笠置山地、伊賀

上野盆地、鈴鹿山地、伊勢平野、養老山地となっている。そして、京都盆地は奈良盆地の北側への延長として、琵琶湖を含む近江盆地は伊賀上野盆地の北側への延長とみなすことができる（巻頭図版2-1参照）。これらの山地と盆地・平野・海の境界には、複数の活断層が存在し、山地を隆起させ盆地・平野・海を沈降させるような地殻変動を生じさせている。このため、山腹の斜面は極めて急崖をなしている。他方、山地部は平坦で広いのが特徴である。また、準平原であった場所が隆起したために、山頂の高度は比較的揃っており、

いずれの山地も500mから1000mを測る。断層を生じさせるような地殻変動は、現在も継続しており、平均すると年平均1mm程度の変位速度であるとみなされている。なお、このような近畿トライアングルの特徴を作り出した地殻変動は、藤田和夫によって六甲変動と名づけられている。これによれば、断層は東西方向からの圧力に応じて生じたもので、基本的に逆断層である。また、北東-南西に延びる活断層は左横ずれの成分に富んでいる。これに対し、北西-南東方向に延びる活断層は右横ずれの成分が卓越している（PL. 2-1）。

地質図に活断層と記されたもの以外にも、近畿地方には、たくさんのリニアメント（線状構造）が存在している。これらのリニアメントも多くは活断層と考えられる。山地や丘陵を刻む河谷はもちろんのこと、平野を流れる河川の流路もリニアメントを反映していることが多い。安威川の流路もその例外ではない。ただし、安威川の流域は、近畿トライアングルの北西の斜辺の位置にあっており、ここより北西側では、ほぼ東西方向のリニアメントが卓越するようになる。福知山盆地や篠山盆地は東西に延びるリニアメントに一致するものである。

近畿地方の山地は、基本的に共通する成因と形態をもっているために、土地利用上もよく似た特徴をしめす。すなわち、急な山腹にはケーブルカーやロープウェイが敷設され、平坦な山頂には遊園地などの遊戯施設あるいは放送塔などの施設がつくられている。

山地の大部分は、中生代白亜紀頃の花崗岩類のところと古生代末から中生代前半に堆積した泥岩・砂岩などから構成される部分とから構成されている。また、その接触部は接触熱変成しており、ホルンフェルスとなっている。近畿地方の花崗岩は、一般に深層風化が著しく進んでいる。他方、接触熱変成を受けホルンフェルスとなっているところは侵食に対して抵抗力が強い。このため、差別侵食が生じており、ホルンフェルス部分が突出した地形を構成している。このような突出部分は、宗教的なシンボリックな土地利用がなされている特徴がある。たとえば、比叡山や大文字山はその代表的な事例といえる。

近畿地方の山地の中で、北摂地域の山地の森林は、天然林が65パーセントを占め、これまで人工林の割合が低いといわれてきた。たしかに、スギ、ヒノキの植林された比率は多くない。しかしながら、林業統計の天然林の中には、後述するように人間の働きかけがなければ生長し難いアカマツやクヌギ、コナラなどの二次林が含まれている。歴史的に形成されてきた、自然と人間との関係がこの中では見落とされているといえよう。



図1 近畿トライアングルの北西辺の活断層
(数値地図250mメッシュ 京都および大阪)

第2節 丘陵

山地と盆地・平野・海の間には丘陵が存在するところがある。丘陵は、第三紀鮮新世末から更新世前期（約300万年前～約数十万年前）にかけて堆積した大阪層群と呼ばれる半固結状の地層から構成されている。大阪層群は湖に堆積した地層と海に堆積した地層からなるが、その中にふくまれる化石の研究から、湖成層は気候の寒冷な時期に、海成層は気候の温暖な時期に堆積したことが判明している。大阪層群には、Ma 0からMa 11までの12枚の海成層が存在することが明らかにされている。また、多数の火山灰が検出されており、地層の厳密な対比が行われている（M.Itihara, et al 1975）。

六甲変動が本格化したのは新しく、大阪層群が堆積しつつある途上であったことが知られている。すなわち、堆積が始まった頃には、山地は現在のように突出していなかった。このため、現在は和泉山地で隔てられている西南日本外帯に分布する結晶片岩や緑泥片岩起源の砂礫が、大阪層群の堆積物中に存在する。また、香川県五色台のサヌカイトを大阪層群中から検出することができる。一般に、地質図には岩盤を構成する地層についてのみ記載されて、二次堆積物については記載されないことが多い。このことは、土器の胎土分析や石器の材料の原産地を検討する際に見落としやすく注意が必要である。

第3節 里山からニュータウンへ

さて、近畿地方の山地や丘陵には、気候条件からすると植生として、常緑広葉樹が優先するはずである。ところが、実際には、ここにはアカマツが繁茂していることが多い。これには、人間の活動が大きく関与していると考えられている。花粉分析などを用いた植生復原の成果によると、近畿地方の山や丘陵にアカマツがめだちはじめるのは、それほど古いことではない。弥生時代、古墳時代、古代には、限定された場所でアカマツ林が出現した。たとえば、8世紀中頃には、当時、我が国最大の須恵器の生産地であった大阪南部の泉北丘陵において、燃料として利用されていた炭の原料が、常緑広葉樹からアカマツへ変化したという（大阪府教育委員会1980）。須恵器を生産するためには、大量の燃料と粘土が必要であり、それが原因となり森林が人為的に破壊されたのである。こうして出現した裸地にアカマツ林が二次林として成立したのである。

他方、三島郡島本町広瀬付近の8世紀半ばの様子を描いた「天平勝宝八歳撰津国水成瀬絵図」の山地には広葉樹が記されている（巻頭図版2-3）。古代の荘園絵図の山地に描かれている植生の多くは、広葉樹でありアカマツはあまりめだたないのである。

これに対して、14世紀頃に描かれた荘園絵図に注目すると、集落や水田として利用されている平野の近くでは、広葉樹に変わってアカマツと考えられる針葉樹が優先しているのである（巻頭図版2-4）。そして、中世末から近世にかけて、山地や丘陵、特に集落に近いところではアカマツが定着するようになったのである。

アカマツは、山火事に遭い裸地になったところや人為的に森林を破壊してしまったようなところに繁茂する二次林を構成する。アカマツは、陽樹であり、日当たりのよい所を好む植物である。第一世代のアカマツが、山火事や森林破壊でできた裸地に入り込み生長すると、その根元は日陰になりやすく落ち葉などの影響で土壌も肥沃になる。そうすると、第二世代のアカマツは生長することができないのである。アカマツは、こういった場所ではカシ等との競争に負けてしまうのである。アカマツ林が長期にわ

たり維持されるためには、絶え間ない人間の働きかけが必要である。日々の燃料や肥料として枝打ちや落ち葉かきが続けられないと、アカマツ林は維持されないのである。人間のこういった行動を自然破壊とみる見方がある。その一方、同様のことを森林管理とする見方もある。

1960年代の半ばに始まる経済の高度成長期以前においては、集落に近い山地や丘陵は里山として、日々の生活に必要な薪炭や、水田や畠の肥料を供給し続けた。ところが、経済の高度成長期に生じた燃料革命によって、それまで薪炭に頼っていた状態から石油、ガスといった化石燃料に依存する生活へと急速に変化したのである。その結果、里山へ柴刈りに入る人は激減した。里山は生活にとって不必要な場所になってしまったのである。それとともに、これまで人為的に維持されてきたアカマツが好む環境ではなくなった。潜在植生の常緑広葉樹が復活しはじめたのである。たとえば、京都の比叡山地では常緑広葉樹のシイが7割を占めるにまで復活してきている。このことは、松茸の採集量の変化からも判る。松茸はアカマツの根元にしか生えることのないキノコである。松茸はアカマツの活性が落ちると生えにくくなるのである。松茸の採集量は第二次世界大戦の影響が大きかった1950—60年頃をピークとして、その後、急速に減少しているのである。現在、この減少分を補うべく朝鮮半島から多量の松茸が輸入されているが、これは朝鮮戦争による森林伐採の影響が大きい。しかし、大韓民国では、その後、積極的な森林保護政策に乗り出した。その結果、大韓民国では、近年著しく森林が蘇り始めている。おそらく、大韓民国の松茸採集量は激減するものと考えられる。これに対し、中華人民共和国やモンゴル人民共和国やカナダからの松茸が日本に輸入されるようになりは始めている。これは、現在、中華人民共和国などの国で森林の伐採が著しいことを示している。

現在、日本の各地では、アカマツの立ち枯れ現象がめだつようになり、マツクイムシや酸性雨などの影響が問題とされている。しかし、そのもっとも基本には、人為的な森林伐採がなくなった結果、山地や丘陵の環境が変化し、アカマツの活性が落ちていることが問題なのである。

さて、これまで里山として欠くべからざるものであった集落近くの山地や丘陵は、経済の高度成長期の初期に、無用の土地として二束三文の価値しか持たなくなってしまった。他方、この頃から、人口は都市に集中しはじめ、多量の住宅が必要となった。そこで、このような人々の住宅需要を満たすために、あらたに2種類の土地条件の場所に住宅地が造成された。そのうちのひとつが、低湿地の開発であった。これまで、洪水の危険性や低湿なために居住性が劣ることから、住宅地とはならなかった土地の宅地化が図られたのである。縄文時代の海域であり、その後、ラグーンや湖となっていたような場所が宅地化したのである。また、旧河道も積極的に開発されていった。1960年代になると、河川本流の堤防が整備され、洪水は減少していた。また、低湿地は、農業生産をおこなう上で好ましい土地ではなかった。たとえば水田として利用する場合、地下水が地表下50cm以内に位置する湿田では、1反あたりの米の生産量は4—5俵である。これに対し、地下水位が1m以上も下に位置する乾田では、1反あたりの生産量は8—10俵に達する。また、湿田の場合には冬に麦を作付けするが不可能である。他方、乾田の場合には二毛作が可能である。さらに、農作業の利便性を考えた時、湿田は農家にとって好ましい土地ではなかった。湿田は、農業の機械化を図ろうとした場合に不都合な土地であった。昭和40(1965)年に図式記号が改定されるまで、地形図には乾田と田と湿田の区別がされていたのには、このような理由があったのである。農業の後継者が減少したことや、米の生産調整のための減反が実施されるようになると、湿田は農家にとって最も手放しやすい土地と考えられたのである。こうして、農家にとって価値の低い土地であった湿田は、比較的安価な住宅を求める人たちの宅地となっていたのである。このような場所

に建てられた住宅は、洪水はもちろのこと地震にも非常に弱かった。たとえば、大東水害の際に被害が大きかったのは、このような集落であった。また、兵庫県南部地震の際にひどく倒壊し、死亡者の発生した住宅の多くは、このような低湿地に開発されたものであった(図2)。低湿で軟弱な土地に建てられた住宅は、

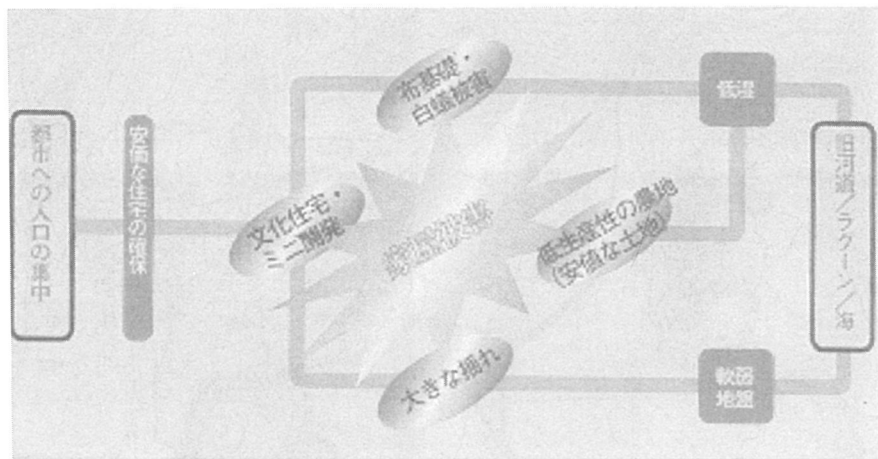


図2 高度経済成長期の低湿地開発と災害

地震の際に揺れが大きかっただけでなく、低湿なために白蟻が発生しやすくその被害にあっていたり、建物の基礎部分の老朽化が著しかったのである。地震の被害は、建物の構造だけでなく、建物の立っている土地の性格も反映したものであった。震災にあって大きな被害にあったのが老人に集中したのも意味があった。経済の高度成長期に30歳代-40歳代で住宅を手に入れた人たちは、それから30年後の現在、60歳-70歳代になっているのである。こうした人々が、今は老朽化してしまった住宅に住み被害にあった。

さて、経済の高度成長期に住宅開発されたもうひとつの場所は、かつて里山であった山地や丘陵であった。ここではニュータウンと呼ばれるような、大規模な住宅地開発がおこなわれた。大規模な住宅地開発が企画された時、里山はすでに燃料や肥料を供給する場所として機能を失っていた。また、里山は村落共同体の共有林であることが多く、広い面積にまたがっていた。このため、大規模住宅地開発のためには好都合な条件を備えていた。さらに、丘陵は大阪層群と呼ばれる半固結の堆積物から構成されていたため、ダイナマイトを使用することなく、パワーショベルやブルドーザーなどの大型土木機械で容易に宅地造成ができるという利点があった。これに比較すると、山地は岩盤から構成されており、造成が難しいことから大規模な住宅地になることは少なかった。ただし、花崗岩で構成される山地は、前述したように深層風化した場所が多く、丘陵と同じように開発が可能であった。時期は少し遅れるものの、住宅地と同様な場所にはゴルフ場も造成された。

第4節 更新世段丘

更新世後期に形成された平野は、完新世になってから形成されつつある沖積平野と河川の侵食した崖で区別されることが多い。この古い平野は、現在、河川の氾濫による堆積が停止し侵食過程に入っており、段丘と呼ばれる。近畿地方の場合、関東地方などと比較すると、更新世に形成された段丘の占める面積は著しく狭い。その分布は、おもに六甲山地の周辺と泉南に集中する。

近畿地方の更新世段丘には二つの特徴がある。そのひとつは、段丘堆積物の厚さが数メートルに過ぎないところが多いことである。したがって、地形分類図を作成すると更新世段丘と分類される場所でも、数メートル以上の高さの段丘崖が存在するところでは、段丘崖に大阪層群が露出しているのである。このため、地形分類図で段丘とされている場所が、地質図に大阪層群とされていることはめずらしくない。

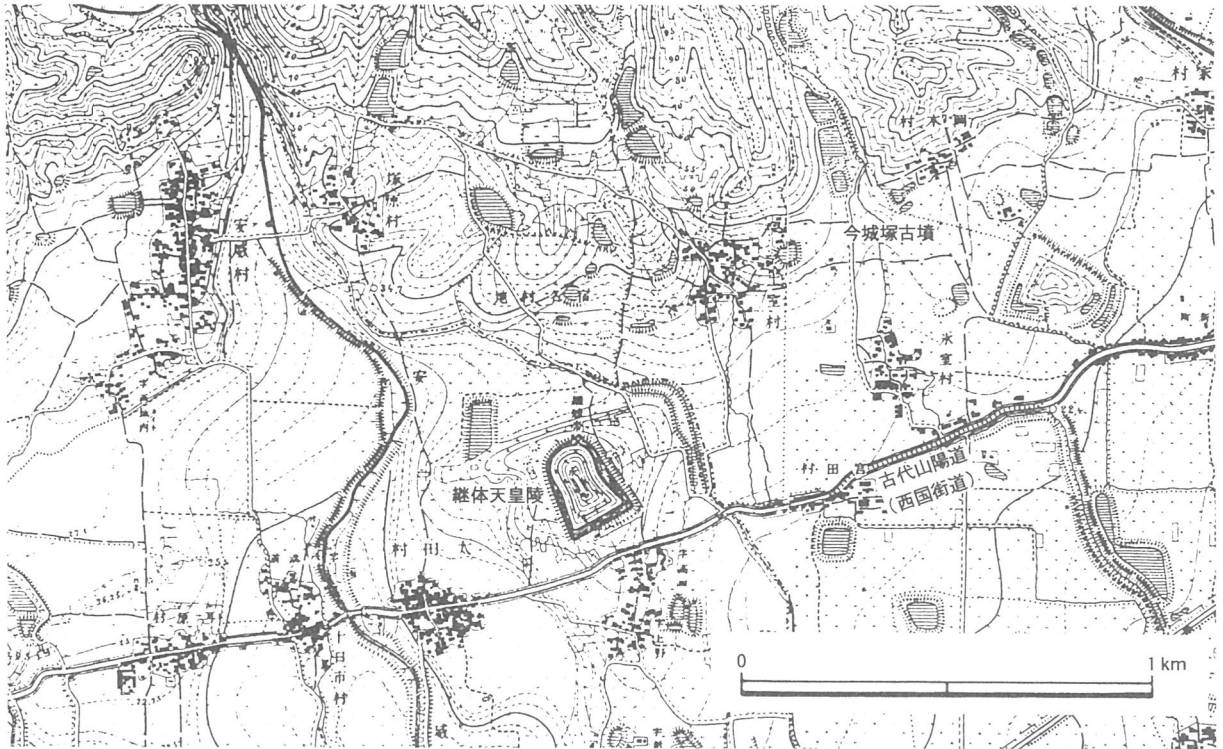


図3 更新世段丘に築造された巨大古墳（仮製1/2万地形図 明治20年 茨木村，枚方）

ふたつめの特徴として、火山噴出物にほとんど被覆されていないことである。したがって、現在の地表面にはそこが形成されていた時の微起伏が残されていることが多く、微地形分類が可能である。段丘には河川の影響で形成された河成段丘と海が大きく作用した海成段丘とに区別することができる。

また、更新世段丘は、形成された時期の違いによって高位段丘、中位段丘、低位段丘の3つに分けられることが多い。このうち、高位段丘は堆積面を残していることが少なく、形成環境は堆積物からしか知ることができない。高位段丘は大阪層群の丘陵を不整合に被覆した河成段丘であると考えられる。地層を構成する砂礫からみて、高位段丘はおそらく扇状地帯として形成された地形面と考えられる。

他方、中位段丘には河成の部分と海成の部分が存在する。たとえば、泉北地域や上ヶ原台地を構成する中位段丘は、ほとんどが扇状地帯として形成された河成段丘である。これに対し、伊丹台地の一部と上町台地は海成段丘である。

低位段丘は、扇状地帯が段丘化したところがほとんどである。また、河内平野では、広い範囲にわたって、完新世の海成層の下に低位段丘が埋没していることが判明している。

更新世段丘は乏水性の土地条件を示すことが多く、耕地として開発されるのは遅かった。「・・・原」とか「・・・野」と呼ばれる段丘が多いことは、このことを反映したものである。段丘は、完新世に入ってから大きな地形の変化を受けることはなかった。しかしながら、その土地評価は時代とともに大きく変化してきた。たとえば、巨大古墳が築かれた場所のほとんどは更新世段丘であった（図3）。段丘は平野の中では地盤が安定していることや、人為的に盛土する土量が少なくとも立派にみえるといった利点があった。また、更新世段丘上には既に開発された耕地がほとんど存在しなかったことも重要なことであったと考えられる。古代になると、国分寺や国分尼寺の多くが更新世段丘上に築かれたが、周辺が耕地化され、見晴らしの良い状態になっていたかどうかは検討の必要がある。古代の段階では段丘上

には、まだ森林が存在しており、国分寺の塔だけが空に顔をのぞかせていた可能性もある。「枕草子」(10世紀末)には、京都の嵯峨野、奈良の飛火野、大阪の交野、播磨の印南野などが原野であったと記されている。また、印南野は、「今昔物語」(12世紀前半)に、山田があるものの、夜には妖怪の出没する荒野と表現されている。古代末には更新世段丘の開析谷に水田が開発され、段丘崖には窯がしばしば築造された。しかしながら、更新世段丘面上の開発が本格化したのは中世末以降のことと思われる。一般的に、更新世段丘上が本格的な灌漑が可能になるのは17世紀の半ば以降のことである。しかも、灌漑施設が整備されていった近世においても、常に水不足は解消されず、綿などの商品作物の栽培が主体であった場所も少なくない。

参考文献

- 藤田和夫 1968 「六甲変動、その発生前後—西南日本の交差構造と第四紀地殻変動—」『第四紀研究』, 7-4
 M.Itihara et al. 1975 Stratigraphy of the Plio-Pleistocene Osaka Group in Sennan-Senpoku area, South of Osaka, Japan. Jour.Geos.Osaka.C.U. 19-1
 大阪府教育委員会 1980 『陶邑Ⅴ』

第3章 安威川の水系

第1節 安威川の水系

神崎川の支流である安威川は、京都府亀岡市の竜ヶ尾山(標高412.7m)に発する東掛(とうげ)川を源とし、途中、栢原(かいばら)川、二料川、下音羽川をあわせ、平野に出たからは、有力な支流である茨木川を合流させる。そして、摂津市に入ってから、淀川の大規模自然堤防にはばまれて向きを西に変える。そして、安威川と同様に淀川に合流できない大正川、山田川、正雀川をあわせ神崎川に注ぐ。長さはおよそ34km、流域面積およそ163km²を測る。

第2節 分水界と行政界のずれ

一般に、分水界や河川は自然的障壁になることが多く、行政界もこれに一致することが多い。しかしながら、安威川について水系図(図4)を作成し、行政界(図5)と比較してみると、大きく異なっていることが判る。特に安威川の上流にあたる東掛川と栢原川の集水域は、大阪府茨木市ではなく、京都府亀岡市に属している。このようにかなり広い面積にわたり、分水界と行政界が府県レベルでずれることは、比較的珍しい現象である。

安威は「和名抄」に摂津国島下郡四郷のひとつとして記されたのを皮切りに、中世の安威荘を経て、1954(昭和29)年に茨木市に合併するまで続いた地域名称であり、現在は大字にその名を遺している。安威村は、1658(万治元)年に十日市村、桑原村を分村した。また、1890(明治22)年には十日市村と合併するなどの変遷があったが、現在の亀岡市域とひとつになったことはない。分水界を越えて亀岡市に属しているのは、現在、東別院町と呼ばれている地域と西別院町の一部である。

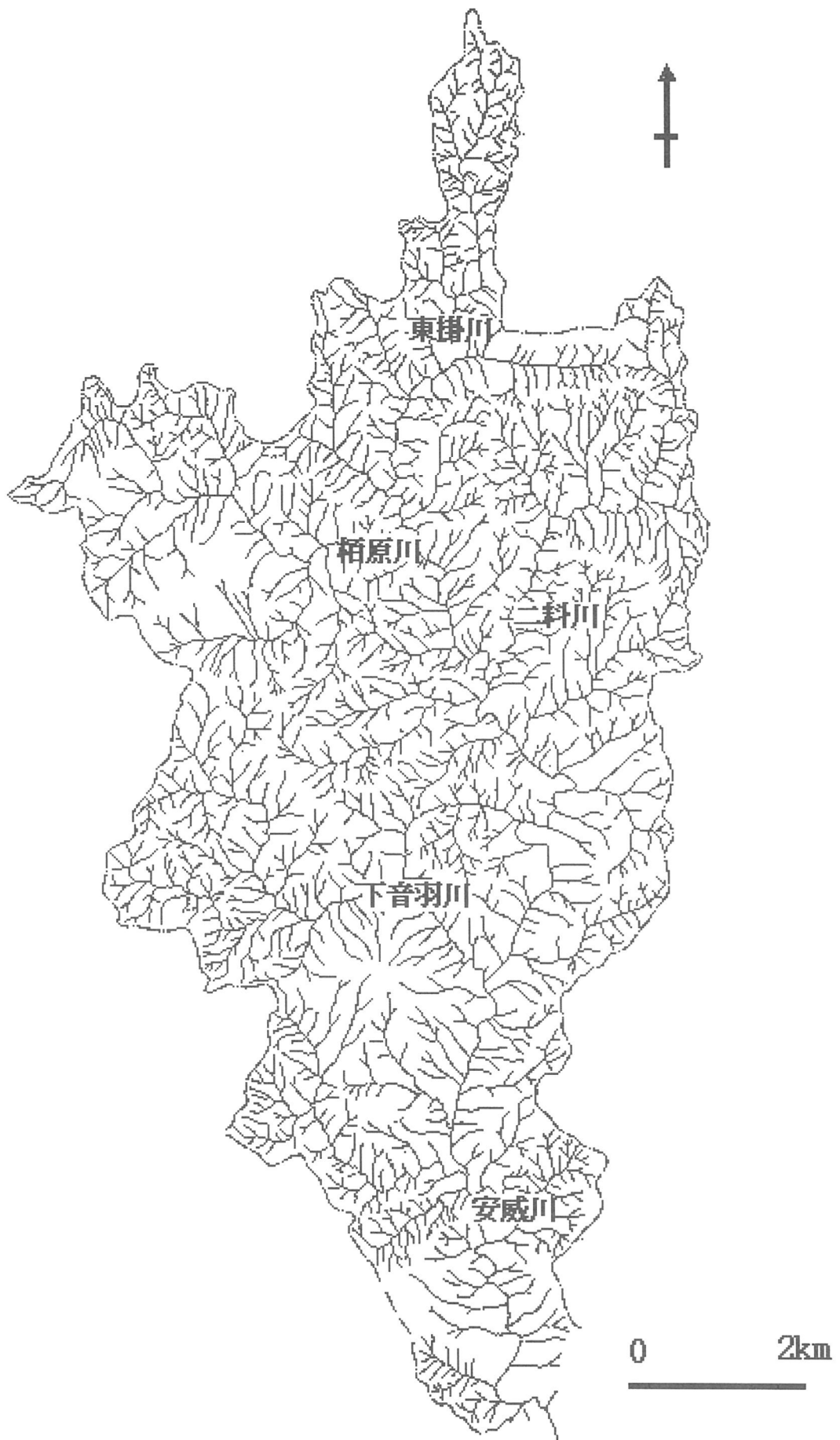


图4 安威川水系图



図5 安威川流域付近の行政区界 (1/5万地形図 平成5年修正 京都西南部)

分水界と行政区が異なる地域はほかにもある。栢原川の支流である二料川の流域は、大部分が現在は高槻市となっている。二料村は近世はじめには幕府領であったが、1634（寛永11）年には丹波亀岡領、1871（明治4）年には京都府に属すようになり、明治12年に南桑田郡、同22年に檜田村の、そして1958（昭和33）年からは高槻市の大字となった。二料はこのように何度かの変遷を経ているが、一貫して安威川流域と同じ行政区に属したことはない。

このほかにも、狭い地域で分水界と行政区のずれがみとめられる。車作の北東に位置する地獄谷峠の西側は、本来、安威川流域であるけれども、高槻市に属している。また、阿武山の北側にも同様の場所がある。

第4章 安威川流域の地形環境と土地利用

次に、源流から、淀川と平行して西に流れをかえる地点までを対象として、安威川流域の地形的特徴をみてみたい。

現在、安威川は西河原1丁目付近で茨木川と合流している。1887（明治20）年に発行された仮製2万分1地形図をみると、当時、佐保川と呼ばれていた茨木川は、安威川と合流することなく、南に流れている（図6）。この旧河道に沿って完新世段丘Ⅱ面の段丘崖が連続しており、茨木川（佐保川）は、古代末—中世初頭にはここを流れていたものと考えられる。また、中世末頃に天井川化したようである。これらのことは、(財)大阪府文化財調査研究センターが発掘した玉櫛遺跡の調査でも確

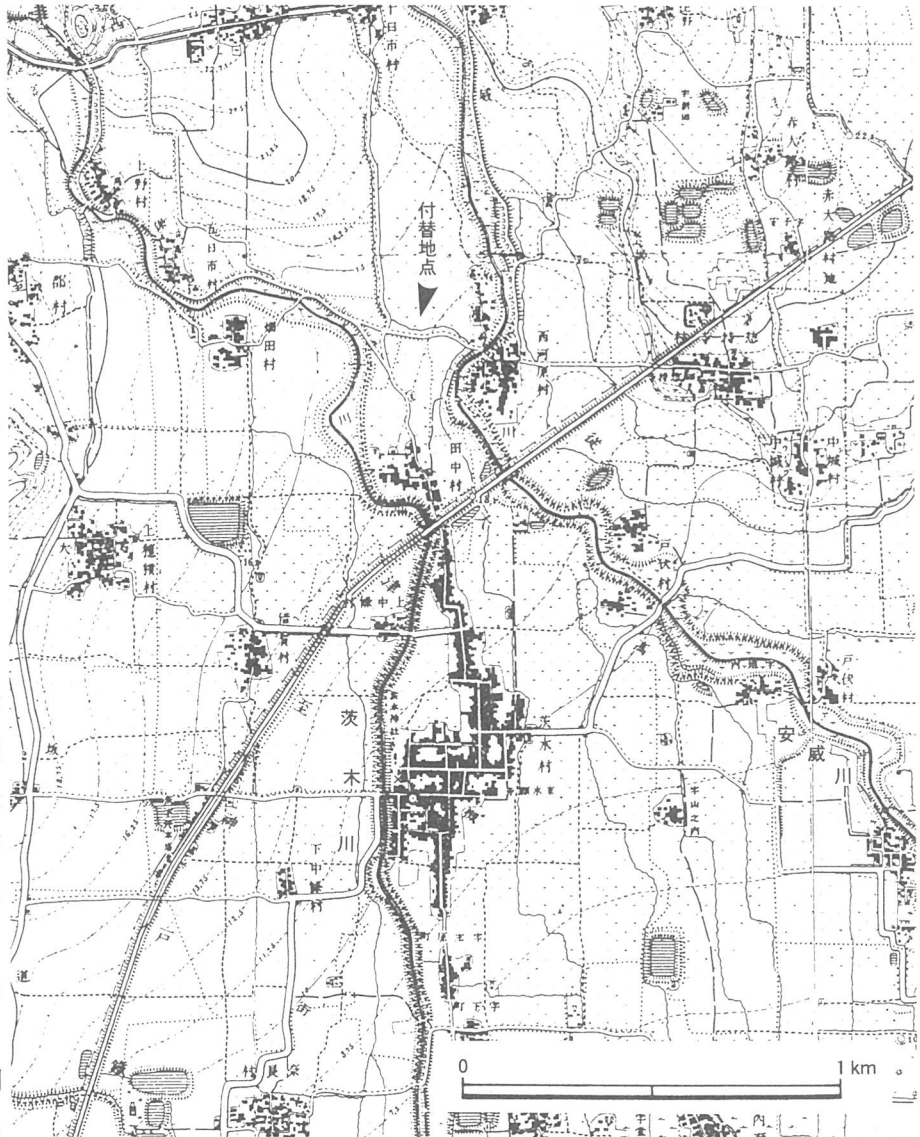


図6 茨木川と安威川（仮製1/2万地形図 明治20年 茨木村）

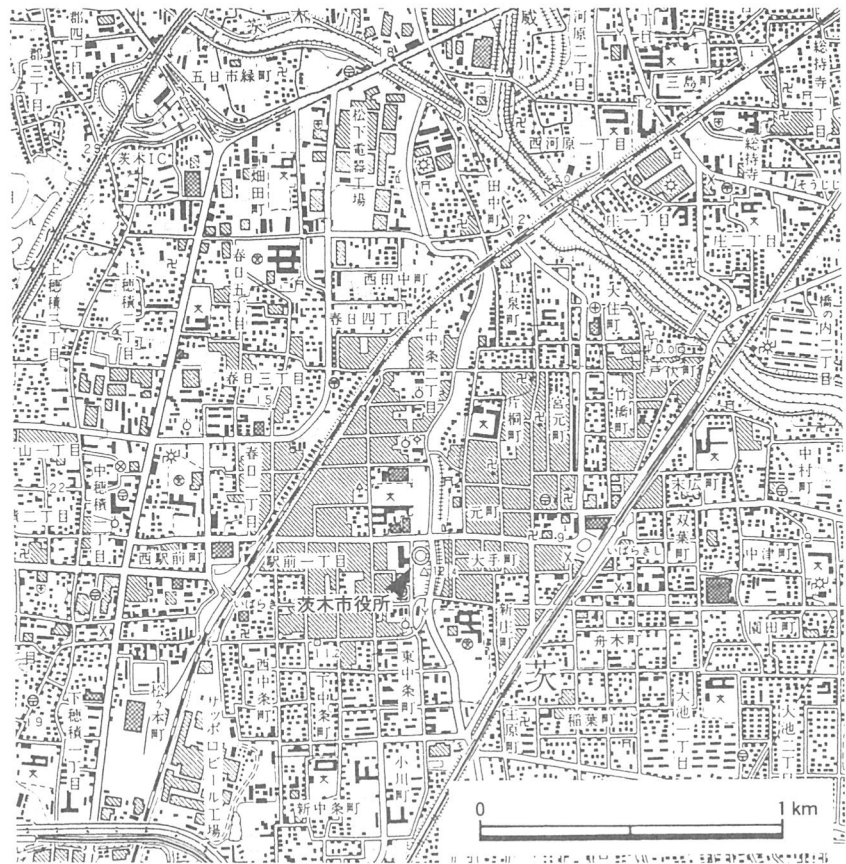


図7 a 茨木川旧河道に立地する茨木市役所
(1/2.5万地形図 平成7年修正 吹田)

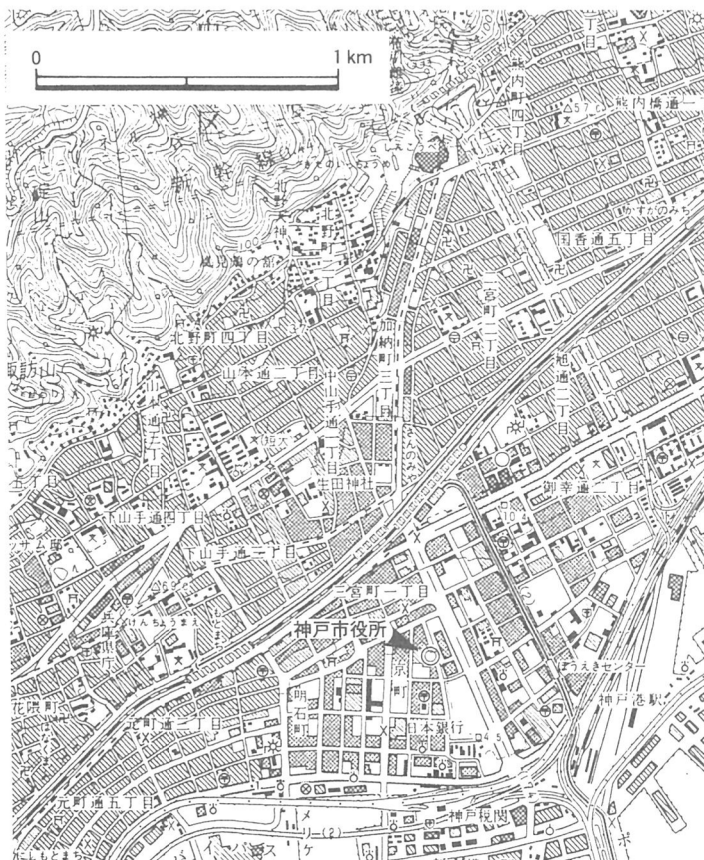


図7 b 生田川旧河道に立地する神戸市役所
(1/2.5万地形図 平成8年修正 神戸首部)



写真1 兵庫県南部地震で大被害を受けた神戸市役所

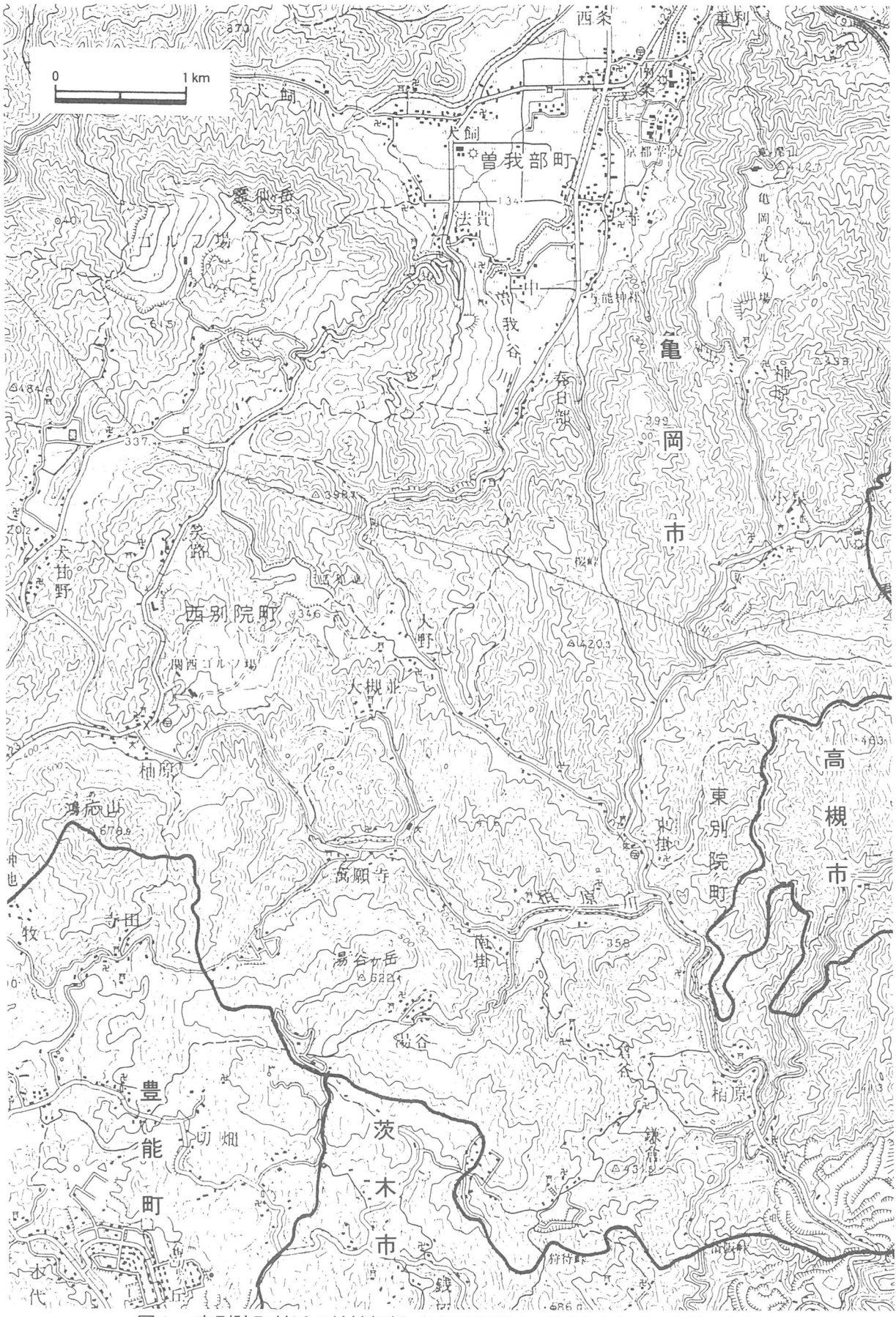


図8 東別院町付近の地域概観 (1/5万地形図 平成5年修正 京都西南部)



写真2 東別院町付近の空中写真
(財)大阪府文化財調査研究センター 1991)

ることができる(巻頭図版3-1)。

認されている。茨木川が安威川に人為的に合流させられたのは、1937(昭和12)年のことであった。これは、天井川化した茨木川が、しばしば氾濫を繰り返すことへの対応であった。

ところで、この旧河道は、現在、元茨木川と呼ばれ、道路として利用されている。また、茨木市役所は旧河道に立地している。この茨木市役所の状況は、生田川の旧河道に立地し、1995年の兵庫県南部地震で倒壊した神戸市役所と極めてよく似ている(図7、写真1)。洪水や地震が発生した時に、対策拠点として機能するためには問題のある立地といえよう。

今回の報告では、以上のような理由によって、茨木川を安威川とは別個の河川と考え、研究対象からはずしたい。このように限定した場合、安威川流域の地形は大きく、山地、丘陵、平野に分け

第1節 山地の地形環境と土地利用

山地は、地形的特徴から、さらに3つに細分することが可能である。

- 1) 東掛川と栢原川の合流地点より上流域。
- 2) 鴻応山から竜王山にかけての地域。
- 3) 車作より下流側に位置し、生保までの地域。

これまでに報告された地質学の成果によれば、このうち1)と2)が古・中生界の丹波層群、3)が主に中生界の花崗岩類で構成されているという。以下、それぞれの地域の地形環境と土地利用について特徴を述べる。

第1項 東掛川と栢原川の合流地点より上流域

最も上流に位置し、支流の栢原川の流域として地域的なまとまりを持っている。この地域が、京都府亀岡市となっていることも、これを反映した結果といえる。

この地域の山地は、古・中生界の丹波層群から構成されている。丹波層群は、主としてチャート、砂岩、頁岩などからできている。また、地形的には、東西方向に延びるリニアメントと南北方向のがみとめられることが特徴的といえる。たとえば、黒柄岳(標高526.9m)とその南側に位置する谷は、東西のリニアメントである。また、二料の大谷から下条へ至る谷も同様な方向性を持つ。さらに、この延長に南掛から落合へ向かう谷が位置している。他方、南北のリニアメントは、源流の竜ヶ尾山から小泉に至る谷などにみることができる(図8、写真2)。

近畿トライアングルに属する安威川流域では、基本的に北東-南西方向のリニアメントが卓越し、そ

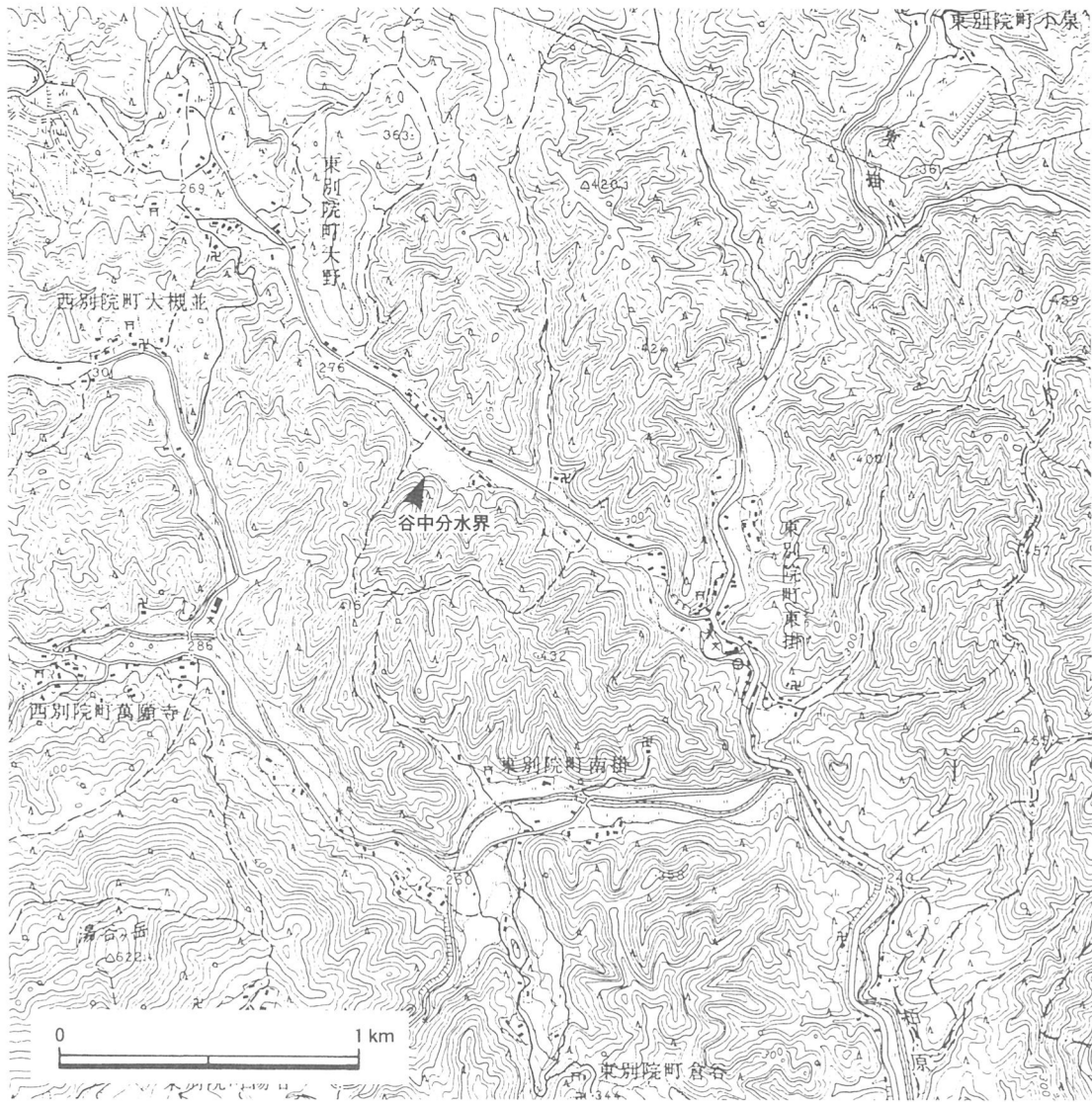
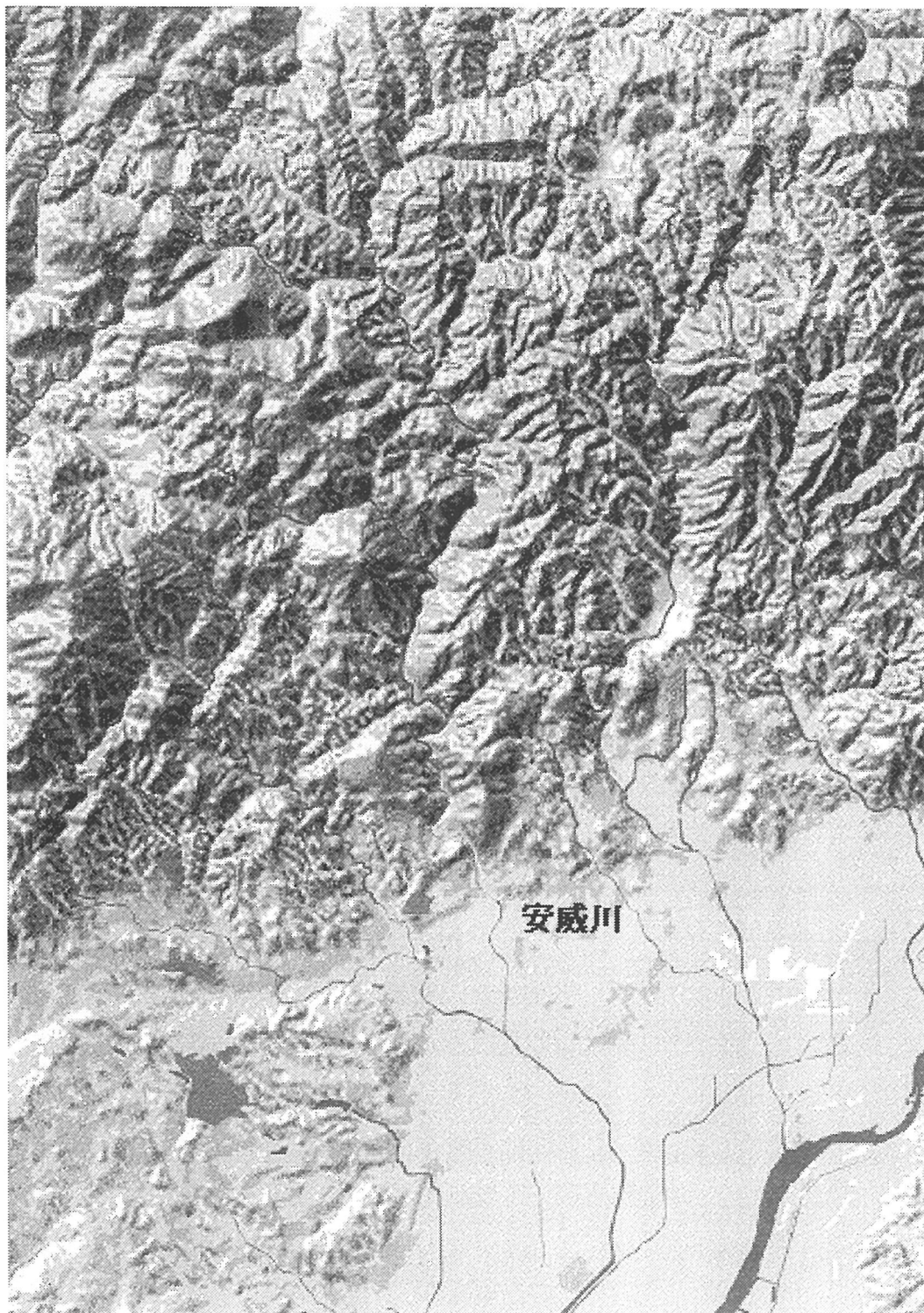


図9 谷中分水界 (1/2.5万地形図 平成3年修正 法貴)

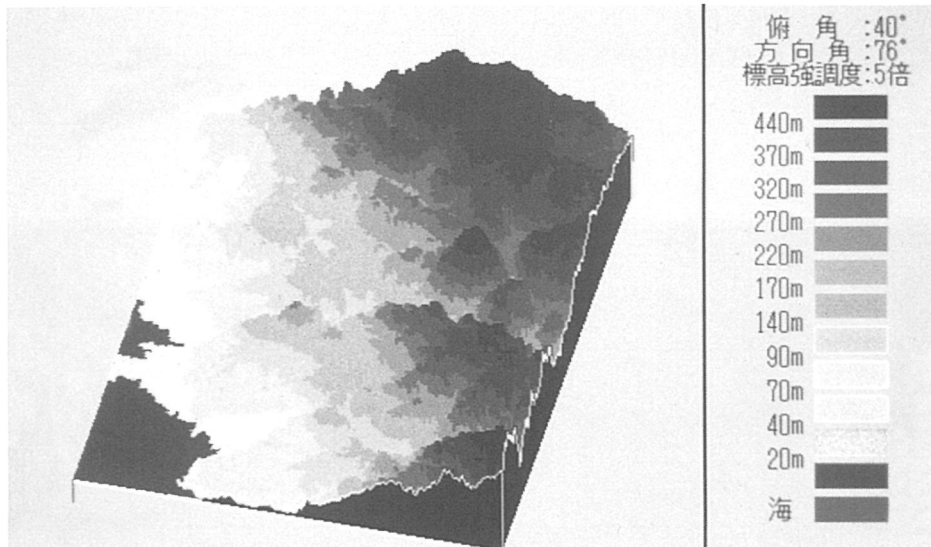
れと共役関係にある北西—南東方向のリニアメントも発達している。これに対し、最も上流にあたるこの地域では、丹波地方に特徴的な東西、南北方向のリニアメントが重合しているのである。丹波地方では綾部から福知山へ連なる盆地、あるいは篠山盆地に代表されるように、東西方向に長軸を持つ盆地群が存在する。これに対応し、山地も東西の方向性を持つものが多い。安威川の上流は、丹波地方の特徴と近畿トライアングルの特徴の両方を持った地域といえる (PL. 1)。山地は300—400mの定高性をもつが、構造線にそって河川が欠床谷を形成しており、山頂から谷までは150m程度の比高がある。

この地域の主要な谷の多くは、リニアメントを構成する断層谷や断層線谷と考えられる。そのため、谷中分水界をなすところが、しばしばみとめられる。たとえば、東掛から北西の大野へ延びる谷、あるいは万願寺から北西に延びる谷などがそれにあたる (図9)。これらの地点では、谷の合流する形状から河川争奪が生じた可能性がある。

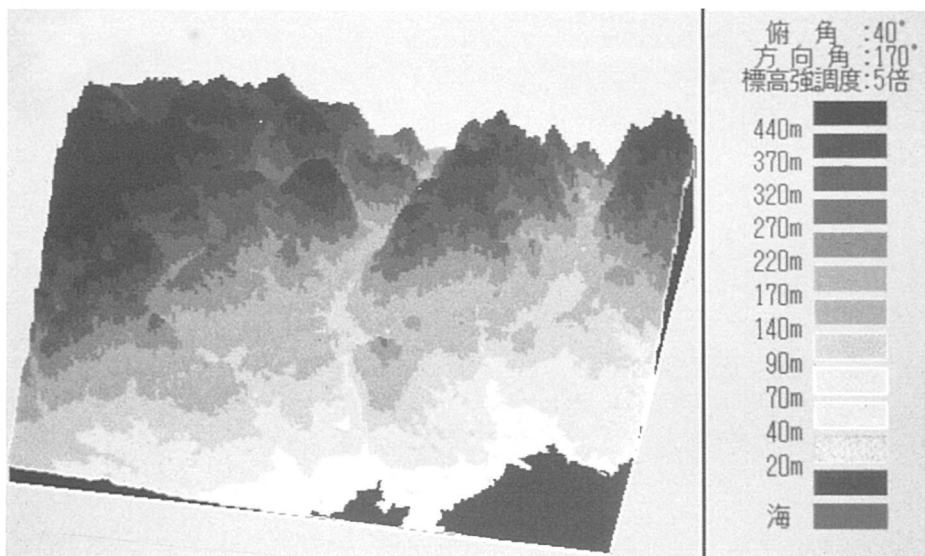
ところで、東掛より上流の山地には、針葉樹が卓越していることが空中写真の判読で読み取ることができる。また、この針葉樹はスギやヒノキの植林で、その伐採や生長の状態から、小さな谷筋を単位にしていることが判る。これに対し、二料川の流域でもスギやヒノキの植林がみられるが、二次林のモチ



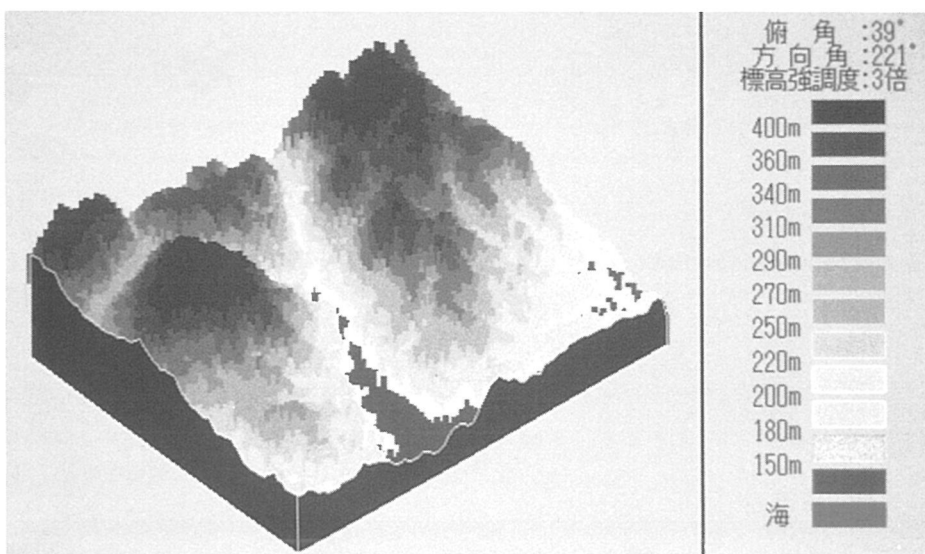
北摂山地のリニアメント



1. 北摂山地の活断層 (数値地図50mメッシュ 高槻)



2. 鴻応山から竜王山付近の地形 (数値地図50mメッシュ 高槻)



3. シンボリックな地形の竜王山 (数値地図50mメッシュ 高槻)

ツツジアカマツの群落やヤブムラサキコナラ群集がめだつ（巻頭図版3-2）。

集落は谷に沿って延びる交通路に面して帯状に点在する傾向が強い。谷の形状が構造的欠床谷であるため、集落の形態だけでなく土地利用全体が制約を受けている。農業的土地利用としては、幅50m以下の谷に両岸から流出した土石流扇状地帯に不整形の水田がみとめられるに過ぎない。河川は谷底深くを流下しているため、灌漑に利用することは困難であり、天水に頼っているところがほとんどである。そのほかにめだつた土地利用としては、竜ヶ尾山の南斜面に造成された亀岡ゴルフ場がある。

この地域の集落のうち主要なものについてみると以下ようになる。

東別院町神原 世帯数7、人口27。江戸時代の村として記録されている。近代は東別院村。臨済宗相国寺派正法山神晶寺と神社がある。

東別院町小泉 世帯数23、人口93。江戸時代から村として存在する。近代は東別院村。単立臨済系緑岩山清泉寺、日蓮宗鶏冠井石塔寺末小泉山好堅寺、そして神社がある。

東別院町東掛 世帯数46、人口209。江戸時代から村として存在する。近代は東別院村。東別院町の中心で小学校、郵便局、駐在所、農協がある。東掛城跡と館跡が残る。曹洞宗永平寺末瑞祥山春現寺、神社がある。

東別院町大野 世帯21、人口100。江戸時代から村として存在する。谷中分水界があり、摂津側と丹波側に別れる。集落の中心は丹波側にある。近世は東別院村。

西別院町大槻並（おおつくなみ） 世帯11、人口32。江戸時代から村として存在する。近代は西別院村。大光寺末天王山極楽寺、素戔鳴神社がある。

西別院町万願寺 世帯23、人口98。江戸時代から村として存在する。近代は西別院村。万願寺跡、大宮神社、曹洞宗永沢寺末万願山積善寺がある。集落の西南西1kmのところの宅地造成がみられる。

二料 世帯23、人口92。江戸時代から村として存在する。近世はじめには幕府領、途中から丹波亀山藩領。近代には榎田村に属する。大谷、上条、下条の集落から構成されている。真言宗法性寺、毘沙門堂、藤井神社がある。

東別院町栢原（かいばら） 世帯50、人口185。江戸時代から村として存在する。近代には東別院村。真言宗智山派京薬王院末禅庄山金輪寺、浄土真宗本願寺派九折山徳円寺、熊野権現、天満宮がある。

第2項 鴻応山から竜王山にかけての地域

この地域は、上流部と比較して小さな谷によって刻まれることがなく、穏やかな山地となっている（図10）。鴻応山から清阪峠まで、北西-南東方向に主軸が延びている。山頂の高度は、鴻応山が標高678.9m、湯谷ヶ岳が標高622.4m、竜王山が標高510.0mを測り、上流域の山頂高度より100-200m高い。これは、この地域が、古・中生界の丹波層群と、南側に位置する中生界の花崗岩類との接触する場所になっていることから、丹波層群が接触熱変成しホルンフェルスと化しており、侵食に強いことによると考えられる（PL.2-2）。

この地域の東端では、安威川（栢原川）は、九折（つづれ）から車作まで、長さ約3km、深さ150mほどの峡谷を形成しているが、これも侵食に対する抵抗力の強いことが原因である可能性が高い。

現在、この山地の分水界が、ほぼ京都府・大阪府の県境となっている。安威川の本来の分水界ではなく、この山地が行政界に選ばれたのは、標高の高さと狭窄部の存在が大きな理由であったものとみてよからう。

さて、安威川（栢原川）は、九折から県境まで北西－南東方向のリニアメントにのり、県境から車作までは北東－南西方向のリニアメントにのっている。また、九折から清阪（近世には鳥居峠とも呼ばれた）峠、下音羽、忍頂寺、千提寺を経て泉原へ貫ける道路（清阪街道）も北東－南西方向のリニアメントを利用している。さらに、東別院町鎌倉と銭原長谷を結ぶ道路も同様な性格をもったものといえよう。

この山地の南東端に位置する竜王山は、下流域からみると、非常にめだつ山容をなしており信仰の対象となってきた（PL. 2－3）。山頂近くには融通念仏宗宝池寺がある。その境内には湧水のある池が存在し、八大竜王堂がある。雨乞いに霊験があるといわれている。

この地域は、現在、二次林のヤブムラサキコナラ群集が卓越する地域となっており、近年、森林伐

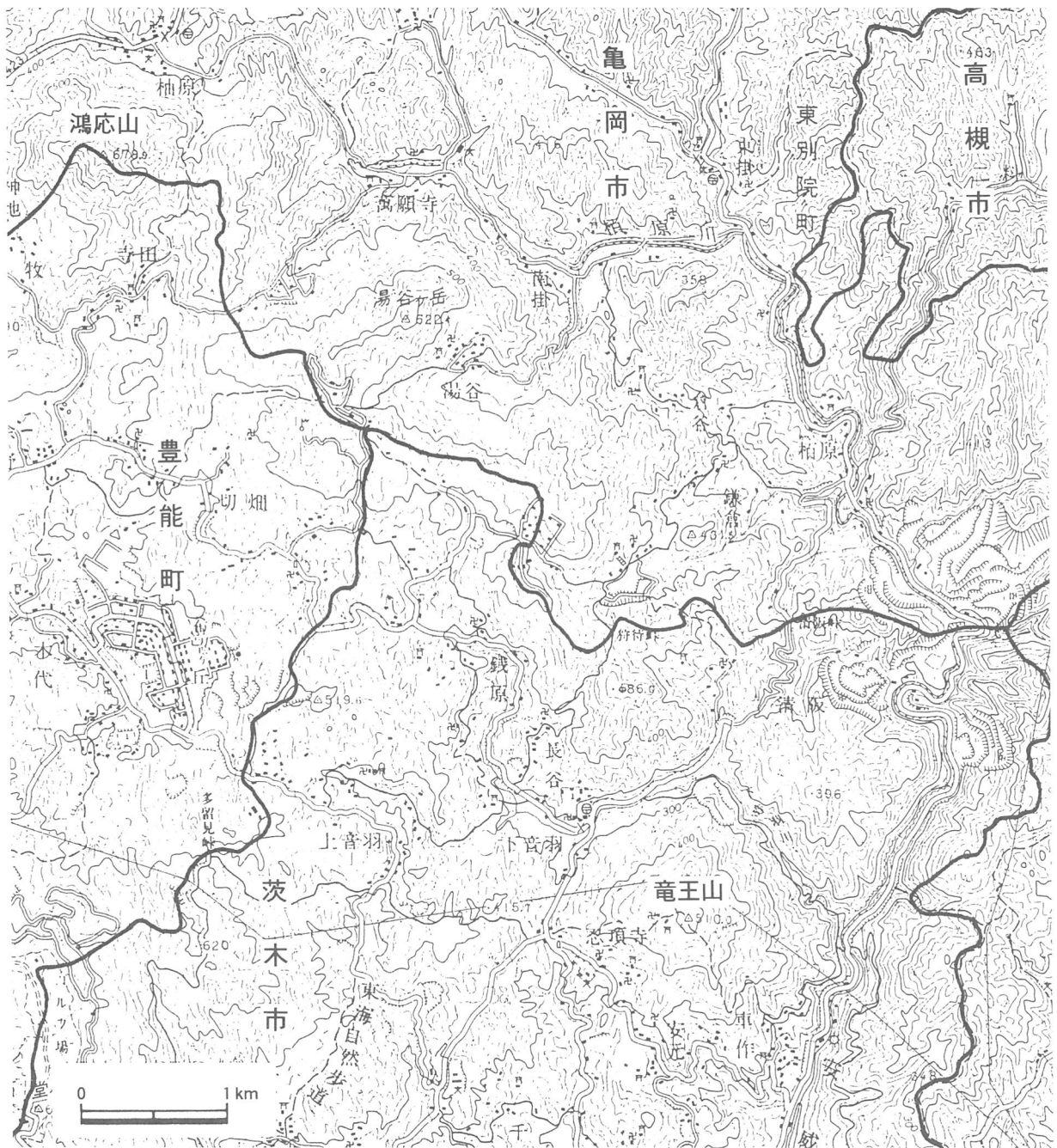


図10 鴻応山から竜王山にかけての地域概観（1/5万地形図 平成5年修正 京都西南部）